

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その二

〔四〕 思慮深い家長

内容梗概

(一) 序 論	二 (156) 頁—五 (159) 頁
(二) 宥和の旋律	
(1) 頭韻と詩脚	六 (160) 頁—七 (161) 頁
(2) 内省する魂	八 (162) 頁—一 (165) 頁
(3) 生ける静謐	一 (165) 頁—一五 (169) 頁
(三) 燈火と松明	
(1) 生成と消滅	一六 (170) 頁—一七 (171) 頁
(2) 燈火と月影	一七 (171) 頁—二二 (176) 頁
(3) 発酵と解体	二二 (176) 頁—二八 (182) 頁
(四) 思慮深い家長	
(1) 緒言	二九 (68) 頁—三〇 (69) 頁
(2) 親友ランダウエル	三〇 (69) 頁—三五 (74) 頁
(3) ランダウエル絨毯毛織物商会	三五 (74) 頁—三八 (77) 頁
(4) 共和精神と専制	三八 (77) 頁—四二 (81) 頁
(5) 結語	四二 (81) 頁—四四 (83) 頁
Zum Verständnis dieser Arbeit	四五 (84) 頁—六〇 (99) 頁
註 解	六一 (100) 頁—六三 (102) 頁

※既刊部は註解ともに、高知大学学術研究報告第三十四巻、人文科学、一五五頁—二〇一頁所収（一九八六年二月刊）。

※本論の骨子は既に一九八四年（昭和五九年）一〇月一日刊の日本独文学会編『ドイツ文学』第17号に「LANDAUER——ein sinniges Haupt」 in Hölderlins „Brod und Wein“（八三頁—九一頁所収）として公刊された。

高 橋 克 己
人文学部独文研究室

本論要旨

毛織物商人ランダウエルと詩人との親睦には、銀行家ゴントルトと詩人との間に生じた様な現実には有りがちな市民と芸術家との軋轢を乗り越え、心の深い所で「思索家と実務家とが然かるべく一体化」している稀有な出会いが見られ、この現実での調和ある対立を歴史上での礎として詩歌象徴「思慮深い家長」では心の内と外から異質な魂同志が邂逅する。

一元化され得ぬこの多様の一者は思想詩の本質契機として、西欧近世市民社会形成原理たる専制ならぬ共和精神へと繋がる。本論では更にこれを一七九七年に創設されたランダウエル絨毯毛織物商会の経営形態にも確め、「思慮深い家長」を経済面からも基礎づける。史料は一八三二年の工場目録で、この統計の分析から商会在来の問屋制を軸とした工場制手工業で、しかも専制画一化した集合形態ならぬ分散形態であった事実が確認され得る。

共和制と専制との明暗を更に、内地部の新興企業家ランダウエルと旧来のハンザ都市貴族との利害関係と見ると、内地ドイツ独自の工業発展と関税同盟成立が注目される。即ち同盟成立以前に中継ハンザ海外貿易の比重は大きく、この経済上の偏向が国内産業発展の停滞と内地部の農業優位に附合し、技術後進国ドイツは先進国の言わば植民地に甘んじ、農産物輸出と織物工業製品輸入に終始していた。故に内地工業発展とハンザ都市貴族没落は経済上表裏をなし、実際一八九七年百年目に商會はランダウエル兄弟株式会社へと躍進し産業革命の進展を具現したのである。ところが最後にユダヤ人迫害と共に不運が訪れる。即ちこの会社の経営者イスラエル・ランダウエルが国家社会主義の時代には民族に敵する国賊として弾劾され、第三帝国に財産没収（一九四二年）されてしまう。かくして「思慮深い家長」の共和精神の土壌に生い育った商會は、全体主義の専制の手先であった秘密国家警察により蹂躪されてしまったのである。

(四) 思慮深い家長

(1) 緒言

ドイツ精神史にとり何がフランクフルトとホムブルクでなされたのか、これを早急にヴァイマルやイエーナの眼鏡で見てはならない。つまり見えないからである。ここ西部ドイツでは、フランス革命がひき起こした封建制崩壊が全く身近に感じられ、……

(ペゲラー「ドイツ精神史における登頂前夜ホムブルク」序言)

更に私はこの脈絡で「フランクフルトとホムブルク」に続き「シュトゥットガルト」をも付加したい。例えば本論に関する「思索家と実務家」(2)(7)あるいは市民と芸術家の問題にしても、ゲーテの「タッソー」(一七八九年)やマンの「ブデンブローク家」(一九〇一年)に見られるような宮廷人や都市貴族の倫理観にはまず浮上して来ない、異質な魂同志の稀有な出有いが、正に当時では現実のシュトゥットガルトにおいて成立し得た事実があり、この史実の裏付けをも踏まえて始めて実存の根を張り、シラーやゲーテには望み得ない思想詩の豊かな調べが響き出すのである。

此所では俗説に云う、市民社会形成への参与に失敗し挫折したと言つが如き夢想家ヘルダーリンの姿は掻き消される。実に思想詩「パンとぶどう酒」こそは、既成の封建道徳と辻褃が合うような体制教会の説教を思索と熟慮の深みから見限り破邪するのみならず、単なる夢想家の冥想へと自己閉塞し得ぬ生々しい当時革命期の現実を映す心の鏡でもあり、本論ではこれを産業革命の進展と睨み合わせて考察してみたいと思うのである。

既に私は本論の扱う思想詩第四句の詩歌象徴「思慮深い家長 (ein sinniges Haupt)」に關し若干の考察を試みた。その折の問題は、和訳ヘルダーリン全集の訳語「抜かりのない商人」(手塚富雄訳)と、私の提示した訳語「思慮深い家長」との比較検討であった。問題点は既に此所に二つあり、第一は形容詞の解釈で、「思慮深い」と「抜かりのない」との対比、第二は主語名詞の訳語である「家長」と「商人」に関するものであった。

この際、第一の問題点である形容詞の訳語に關しては、既に明確な解答が与えられたと私は考えている。まず「sinnig」の語義に關して言えば、諸家の訳語「songeur」(4)、「gindizioso」(5)、「pensive」(6)のみならず、「へさかしい」などの悪いひびきは「(南原実註)とする解も明示しているように、当該の形容詞は素直に読んで否定的よりは、むしろ肯定的な意味に解されるからである。しかしながら敢て「抜かりのない」と読むには、或る了解が先行している。すなわち引き続き第五句で、「悠然と和やかにわが家にくつろぐ (Wohlaufrieden zu Haus)」と歌い継がれる脈絡を、例えばヴァックヴィッツのように「市場での営業が儲かったからである」と考え、当該の第四句に搾取階級ブルジョワ (bourgeois) を読み取る場合がこれである。

恐らく孤高の詩人と綽名されるヘルダーリンには、「収支得失を慮る (Gewinn und Verlust wäget)」(第四句)と云う筋が一見疎遠な詩歌象徴と映るのも止むを得ないかも知れない。だが心して思想詩冒頭を読み進んでみると、実は一見疎遠なこのような現実が、見事に格調高い詩歌の響きに乗り歌い上げられているのに読者は驚くのである。何故に驚くかと言えば、俗人ならぬ詩人ヘルダーリン、あの古典ギリシアの崇高美へと眼差を向けて逸らすことなき稀有な魂が、然り気ない有り来たりの日常性を温かく見守りつつ静かに歌うからである。

静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともり、
して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
満ち足りて家路へと、昼間の歎びに別れを告げ、安らぎを求めて歩みゆく人々。
して収支得失を慮る思慮深い家長は

五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は) 葡萄も花束もなく、
して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は) 忙しい広場の市場。
〔パンとぶどう酒〕第一節、第一句―第六句)

此所では現実の生において遠く隔ったもの、全く異なる方向へと自己実現する魂同志が出会っている。故に「収支得失(Gewinn und Verlust)」(第四句)と言っても、「金銭のもうけだけでなく、今日の一日は自分に何をもちたか、自分はこの一日に何を学び、どういう失敗をしたか、ということ」(南原実註)をも含む、人間の内外に互る心の揺れであり魂の律動なのであるから、「抜かりのない」と云うよりは、むしろ「思慮深し」と当該の形容詞は解されるのが自然なのである。

他の「家長」か「商人」かと云う問題に関しては、本論の引き続く論述で明らかとなる「思慮深い家長」たる商人ランタウエルを念頭に置くならば、両者ともに語義の上からは間違いないと言えない。しかしながら既に別論(註(3))でも述べたように、実際に文脈に即して「パンとぶどう酒」を第四句から第五句にかけて読み進んでみると、

四 …… ein sinniges Haupt
五 Wohlfrieden zu Haus; ……

読点(欧語では)が第四句末になく、第五句頭へと休止を置かず流れゆく律動の中において、頭韻(H)をなして Haupt …… Haus と呼応する響きが注目に値する。そしてこの響き合いから、第五句に云う「家(Haus)」と協和して、第四句末は「家長(Haupt)」と読み得ると思われるのである。

四 …… 思慮深い家長は
五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。 ……

(2) 親友ランタウエル

以上のように文脈上で既に積極的な意味合いを帯びる「思慮深い家長」(第四句)を念頭に置いて、思想詩「パンとぶどう酒」の成立背景をヘルダーリンの伝記に探ってみると、当時の現実から毛織物商人ランタウエル(一七六九年―一八四五年)の姿が浮かび上がってくる。興味深いことに実は思想詩成立に先立つ一八〇〇年夏六月から、収獲の秋を経て翌一八〇一年一月に至る約半年間、詩人はこの親友ランタウエルのもと、すなわち領邦ヴェルテムベルクの首都シュトゥットガルトに居を構えており、実際「パンとぶどう酒」冒頭で「静かに安らう都市(Rings um ruhet die Stadt:)」(1) (11)と歌われている、この「都市」が他ならぬシュトゥットガルトと考えられるのである。

更に思想詩を読み進んでみると、第一句後半では「ひそやかに街路に燈火がともり、(still wird die erleuchtete Gasse:)」と、引き続き第二句では「して松明に飾られて騒然と(幾台もの)馬車が(大路を)疾駆し過ぎ去る(Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg:)」と歌われる。まず此所での「街路(Gasse)」(第一句)と大路(Straße)とに關して具体化してみよう。第二句で「幾台もの馬車が大路を疾駆し過ぎ去る」と歌われていることを念頭に置くと、恐らく第三句に云う「家路へと歩みゆく人々(… gehn heim …… zu ruhen die Menschen:)」は「街路」を通ると考えられよう。この際に「大路」として当時の領邦首都シュトゥットガルトの目抜き通り、すなわち今日の「ケーニヒ大路(Königsstraße)」を考へると、この大路

を宮廷オペラ劇場(欧文註(4)(12)掲載市街図15)を直指し、つまり今日の中央駅方面(北東方向、掲載図では右方向)へと向け、華麗な出で立ちで「松明に飾られ騒然と幾台もの馬車が疾駆し過ぎ去る」と読める。

他方「家路へと歩みゆく人々」は、その「ケーニヒ大路」からは入りこんだ何処かの「街路」を通り、「悠然とわが家にくつろぐ(Wohlfrieden zu Haus)」(第五句)のために帰宅する。この家路へと安らぎを求め歩みゆく市民と、前述の宮廷オペラ劇場(Opernhaus)すなわち「歓楽の館(Lusthaus)」での遊興へと自家用馬車で赴く門閥との折り成す接点、具体化する「ケーニヒ大路」と「ホスピタル教会(Hospitalkirche)」(南西側(4)(12)掲載図13の左横)へと伸びる「学院通り(Gymnasiumstraße)」とが出会った付近に、当該の「思慮深い家長」(第四句)の商館つまりランダウエル邸が建っていたのであり、詩人ヘルダーリンはこの豪商の館に「室を構えて世話になっていた模様である。

恐らく古典ギリシア悲劇でも読みながら、心の深い淵での魂の歌声へと傾聴する詩人には、「静かに黄昏の夜気に響く(教会の)晩鐘の音(Still in dämmeriger Luft ertönen geläutete Glocken.)(第十一句)とか「また時を刻み数を告げる夜警の声(Und der Stunden gedenk rufer ein Wächter die Zahl.)(第十一句)のみならず、「更に噴泉が(und die Brunnen) 滔々と湧き、して清冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を響かせる(Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet.)(第九句―第十句)と歌われる無言の自然の脈動も明らかに聞こえた」と想像される。故に他方「馬車が疾駆し過ぎ去る」(第二句)のは、必然として「騒然」としたものであったと解されるのである。

かく内省する魂が「パンとぶどう酒」冒頭では、包容力豊かな「思慮深い家長」たる豪商ランダウエルのもとに安らぎを得て憩い、「思慮深い家長は悠然と和やかにわが家にくつろぐ」(第四句―第五句)と高らかに歌い上げ、敢て市民生活の日常を温かく見守る。此所では通常相互に遠く隔

たっている者同志が、「調和ある対立(Harmonischentgegenesetzt)」を織り成して邂逅している。一方は実生活の上で経済活動に励み自らの経営の手腕を發揮せんと「収支得失を慮る思慮深い家長」であり、他方は内省する魂の奥底から「祖国(ドイツ)の詩歌の崇高で純粋な歓呼(das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge)」を歌い上げんと古典詩文味読に余念なき思索家である。この心の内と外との両極が、とかく日常の現実には有りがちな「芸術家と市民」との相克を乗り越え、異質な魂同志の稀有な出会いとして成就していると思われる。

もし現実はこの稀有な親睦が無かったとしたならば、当然「パンとぶどう酒」冒頭の「思慮深い家長」は瞑想家の空想に過ぎない観念の所産となろう。ところが事実は虚構(Dichtung)をも凌ぐ真迫力を以て詩歌象徴を充実させる。例えばランダウエル邸に居を構えた翌月、つまり一八〇〇年七月に詩人は母宛書簡で近況報告を述べて次のように心中を語る。

当地に参りましてから私は、…… 久しく見失なわれておりました寛ぎと安らぎ(Zufriedenheit und Ruhe)を心に抱いております。此所の人々は大変親切なのです。

思想詩冒頭の基調と照応する現実が此所に語り出だされている。「寛ぎ」は第五句冒頭「悠然と和やかにくつろぐ(Wohlfrieden)」で高らかに歌い上げられ、「安らぎ」は冒頭六句において三度「安らう(ruhet)…… 安らぎ(ruhet)…… 安らう(ruhet)」(第一句と第三句と第六句)と響き渡ることとなる。

実際ランダウエル家での住み心地は、ヘルダーリンに大変良かったようである。このことは更に詩歌「ランダウエル君に(An Landauer)」が十二分に物語っている。実はこの詩歌は、親友クリスティアン・ランダウエルの三十一歳の誕生日であった、西暦一八〇〇年十二月十一日を祝し

て創作され、同月の聖夜 (Weihnachten) にランダウエル家に集った客人の皆知る旋律で以て歌われた模様である。殊にその第五句以下に注目してみよう。

ランダウエル君、君のように、わが家に平和 (Frieden) と慈み (Lieb) と充足 (Fülle) と、そして安らぎ (Ruh) を見出す人は、至福 (seelig) なのだ。

〔ランダウエル君に〕第五句—第六句)

此所でも先程の書簡(註(3))に確かめた「パンとぶどう酒」冒頭の基調 (ruhet ... ruhen ... Wohlfrieden ... ruht) が、「平和 (Frieden)」と「安らぎ (Ruh)」と云う表現と美しく呼応し合っているのである。

このように詩人の魂の奥底から商人ランダウエルに向かい諧調な歌声が奏でられるには、当然「思索家と実務家」とが然かるべく一体化してゐる (Denker und Geschäftsmann, wie es sich gehört, vereint) と云える現実が誕生していることを前提としている。実はこの「思索家と実務家」との諧調を詩人自身が心から願ったのは、行政の実務に携っていた異父弟カール・ゴック (一七七六年—一八四九年) に対してであった。すなわち父ヨハン・ゴック (一七四八年—一七七九年) 譲りの「活動的精神 (der thätige Geist)」に向かい兄ヘルダーリンは次のように語りかける。

おまえは哲学 (Philosophie) を学ばなくてはいけない。たとえ一台の油燈と油を買うだけに必要なお金しか残っていないとしても、また真夜中から鶏の鳴く頃までしか時間が無くとも。このことは、どんな折でも兄さんが繰り返し言っていることで、おまえの考えでもあるのだ。……もし将来おまえに、思索家と実務家とが然かるべく一体化しているのを認めることが出来れば、兄さんは全体どんなに嬉しいことだろう。

(一七九六年十月十三日付弟宛書簡)

本論の叙述する詩人と商人との親睦においてこそ、正にこの心の内と外とに大きく拡がる現存の豊かな可能性が育まれていと看做されるのである。

ところで「思索家と実務家」との実りある相互対話は、ヘルダーリンとランダウエルの二人にのみ限られた孤立したものでなかった。更に行政の実務に携る公務員の中にも、詩人の学殖に敬意を払い、敢て「哲学の講義」を依頼する人も現われたのである。

幸運にも既に官庁に勤める若い人から、然かるべく願ってもない申し出があり、その人は私に哲学の講義 (Stunden in der Philosophie) をして欲しいとのことで、これに対して毎月一カロリンが支払われます。

(一八〇〇年六月末から七月初め母宛書簡)

これはランダウエル邸に転居して間もない頃であるが、当時三十才の詩人には更に後日、歳上の公務員からも「講義の申し込み」が二件あった。

またもや一件新たな講義 (Lectionen) の申し込みを、ラーシュタットで知り合いました登記史グッチャー氏から受けました。

(一八〇〇年七月二十日頃母宛書簡)

この母宛書簡では此所に云うラーシュタット会議 (一七九八年十一月) にヴェルテムベルク州会議員代表として出席したヤコプ・フリードリヒ・グッチャー (一七六〇年—一八三四年) とともに、一八〇〇年十一月末まで詩人と同じくランダウエル邸に居を構え世話になっていた教会長老会の記帳係ヨハン・ゲオルク・フリッシュ (一七六三年—一八三六年) も、詩人から講義を受けている公務員として名が挙げられている。以上の結果から、

私は目下三人から講義の申し出を受け、どれも皆楽しいものです。
(一八〇〇年七月母宛書簡)

と詩人は語ることが出来たのである。

当時の実務家たちの教養の巾が伺える、このような「講義の申し出」を、実はランダウエルが色々と斡旋していた模様である。

ランダウエルは私が(当地シュトゥットガルトに)留まることを強く望んで
いるらしく、私がお二件か三件ほどは申し出を受け、月に約三リドル
収入を増すようにと取り計らってくれた。
(一八〇〇年十月上旬妹宛書簡)

「思慮深い家長」ランダウエルの「慮る収支得失」(第四句)には、単
に自らの商会経営に纏わる営業のみならず、更に広くこのように詩人、
ルダリーンを心から敬し、この才氣溢れ世渡りの下手な親友の生計をも
苦慮せんとする巾の広さが認められるのである。

ところで前掲の母宛書簡(一八〇〇年七月)で詩人は、「久しく見失
なわれておりました寛ぎと安らぎ」(註(3))が親友ランダウエルの
下で再び見い出されたと告白していた。この脈絡を伝記の上で考えてみ
ると、実は詩人の所謂ディオティーマ・マーズゼツテ体験が此所で浮上
て来る。つまり「ヒュペーリオン」第一巻(一七九七年)で、詩人の
筆力により言わば永遠なる女性へと昇華されたと云える、このディオ
ティーマ体験において恐らく始めて、詩人は真正正銘の「寛ぎと安らぎ
(Zufriedenheit und Ruhe)」を獲得することが出来た模様である。すな
わちズゼツテ・ゴンタルト婦人(一七六九年—一八〇二年)の子弟の家
庭教師時代(一七九六年一月から一七九八年九月フランクフルト)初期
の充実した姿を、ヘルダリーンは詩作上の友ノイファーに向かい心から
喜びに満ちて報告している。

僕はこの上なく元氣だ。屈託なく暮らしている。きつと至福なる神々 (die
seeligen Götter) もこんな生活だろう。
(一七九六年三月付ノイファー宛書簡)

この文字通り「至福」な充ち足りた時期に見られた程の「寛ぎと安らぎ」
が、幸運にも詩人の伝記では再び親友ランダウエルのもとで獲られたと
思われるのである。

「乏しき時代の詩人 (Dichter in dürftiger Zeit)」と「パンとぶ
どう酒」(第七節、一二二句)において自覚し、時代の夜を歩むヘルダ
リーにとり、かくして「寛ぎと安らぎ (Zufriedenheit und Ruhe)」
の稀有な時節は人生で二度訪れたことになる。しかもこの親密なる者た
ちとの邂逅を機に、詩人の実作「ヒュペーリオン」と「パンとぶどう酒」
が実り豊かな詩想展開を始めたのである。伝記上とかく取り上げられる
のは女性ディオティーマ・マーズゼツテ体験であり、確かに外見の華やかさ
において恋愛体験を凌ぐものは無かる。蓋し「思慮深い家長」ランダ
ウエルとの交誼は、もし「パンとぶどう酒」が詩想の豊かさや深みにお
いて「ヒュペーリオン」を凌駕し、前者のキリスト像が後者の永遠なる
女性ディオティーマ像以上に濃淡細やかな詩歌象徴として現象している
点を留意するならば、恋愛体験にも負けず劣らぬ現存の両極の出会いであ
る当該の「思索家と実務家 (Denker und Geschäftsmann)」(註(5))
とが織り成す「調和ある対立 (Harmonischentgegengesetzt)」(註(1))
が重視されて然かるべきであらう。

殊にヘルダリーンの詩歌においては、「母なる大地 (Mutter Erde)」
(16)と共に、「パンとぶどう酒」第四節に三つ「父なる神氣アイテール
(Vater Aether)」(第六五句)が重きを成して、大地ゲルマニア
の母なる懐へと「至福なるギリシア」(第五五句)が「偉大なる運命
(das große Geschik)」(第六二句)として空無の彼方より「普遍的

幸に満ちて、雷鳴とともに清澄なる大気(アイテール)から眼界を過り突入して来る」(第六三句—第六四句)。かくして「永遠なる女性(Das Ewig-Weibliche)」(註(12))なす浪漫情緒は玉碎し、この幽玄なる悲劇の誕生する魂の淵から「祖国(ドイツ)」の詩歌の崇高で純粹な歓呼(das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge)」(註(2))が「父なる神気アイテール」(Vater Aether)」(註(17))と産声をあげる。この「至福」なる「父」と同様に、「思慮深い家長」ランダウエルは詩人にとり全く別世界の存在である。反して女性ディオティーマ像こそ正に詩人の心に適う別かち難き同居人に他ならない。

なるほど全く別世界の存在であるにも拘わらず、否むしる正に全然無縁だからこそ、「パンとぶどう酒」では敢て「父(Vater)」(第一二七句)の懐から「神自身もまた人の姿を取り来臨した(er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an)」(第一〇七句)と歌われる。「パンとぶどう酒」を物語る「聖書」に依れば、「父」たる「神自身」こそ天地万有の「思慮深い家長」に他ならない。しかもこの「家長」の「思慮」は人知の外にありながらも「隠れて働き(Verborgens-wirkend)」つづけていると思われる。丁度そのように詩人のような内面的存在とは一見無縁な豪商ランダウエルが、実は「思慮深い家長」としてヘルダーリンを庇護していたのである。

一七九九年一月一日付弟宛書簡で詩人自身が語る所によると、「何事にもまして僕たちは、あの偉大なる言葉『私は人間なのだ。人間に関するもので私に無縁なものは何一つ無いと私は思う(homo sum, nihil humani a me alienum puto)』を、全き愛と全き真剣さで受け取る」と一応表明することは出来たとしても、実状は難く現に一七九八年十一月十二日付ノイファー宛書簡では本音を吐き、「僕は実生活における凡俗を余りに厭う(Ich scheue das Gemeine und Gewöhnliche im wirklichen Leben zu sehr.)」と告白している。だがしかしなが

ら、「聖書」の父なる神自身、罪人ゆえにこそ世に隠れて働き(註(22))かける正にその様に、「思慮深い家長」ランダウエルは、稀有の詩才が凡俗ならぬ故にこそ、その非凡な親友を俗の側から寛く包容できたのである。

君は全くの四面楚歌だ(Dein Schirm ist durchaus nirgends zu finden.)。だが僕は諸手を広げて君を待た(Dich erwartet mit offenen Armen)

君のクリステイアン・ランダウエル
(一八〇一年八月二十二日付詩人宛書簡)

恐らく「パンとぶどう酒」冒頭の都市像における日常性は、もし豪商ランダウエルとの出会いが無かったならば、あれ程に心をこめて歌われはしなかったであろう。否、そもそも日常の俗界などが、思想詩「パンとぶどう酒」と結びつき得たことさえ、両友の交誼なしには考え難いと思われるのである。

ところで当時の資産家が概して豪商ランダウエルの如く寛大であったかと云うと、事実は恐らく逆であったと推測される。たとえ詩人の伝記に限定してみても、正反対の人物像を探すのは容易である。実は先程ディオティーマ体験の折に触れたズゼッテ・ゴンタルト婦人の配偶者ヤコブ・ゴンタルト(一七六四年—一八四三年)が、毛織物商人ランダウエルと好対称をなす、「仕事第一(Les affaires avant tout)」を旨とした生粋の実務家(reiner Geschäftsman)であった。

銀行家ゴンタルトと商人ランダウエルほど大きく食い違ふ人物はまず考え難い。当然ながら前者は冷徹な現世主義者(Kühler Weltmann)であったが、後者は実務上の人生の課題と或る高次の美意識とを結びあわせる、心術を心得ていたのである。

(ホインシュレ「ヘルダーリンの交友圈」)

こう書くとも如何にも銀行家ゴンタルトが異常な精神の持ち主であるかの様な印象を与えるが、実際には例えばゲーテ作の長篇小説「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」(一七九六年)に登場するヴェルナーと余り異なることなき当時の平均的実業家の一人としてゴンタルトをも考え併せるのが穏当ではなからうかと思われる。

当の長篇小説において「真の商魂(Geist eines echten Handelsmannes)」との関連で、ヴェルナーは「複式簿記」を「人間精神の最も menschlichen Geistes)」と褒め称え、更に別の箇所で「わが愉快な信条(mein lustiges Glaubensbekenntnis)」を次のように告白する。

実務を整え、金を儲け、家族の者と楽しくやり、世間のことで役に立たない事には何一つ関心を払わないことなのだ。

この現実主義者の発言を、実在の銀行家ゴンタルト自身の信条告白と看做しても、恐らく大過ないと考えられ得よう。

このように世間知に長く経済活動に励む通例の実務家の人生観に、抑々ヘルダーリンのように深く物思いに耽り静かに思索をめぐらす詩人の内観が働きかけない事は世に珍らしくない。むしろ稀な場合に「思索家と実務家」との両者が美り豊かな対話を始める。例えばシラーとその親友ケルナー(一七五一年—一八三年)の場合も特筆すべき例であった。但しケルナーは法律関係の実務家、つまり前述のグッチャーやフリッシュ(註(9))のような言わば公務員あるいは官僚であった。考えてみるに、これら法律関係の実務家は職務上すでに公益を代弁するのであるから、民間で経済活動に励み「収支得失を慮る」商人や銀行家とは趣を異にし、敢て「祖国(ドイツ)の詩歌の崇高で純粹な歓呼」(註(2))に耳目をそばだてても不思議ではない。他方民間の実業家は、もし銀行家ゴンタルトのように実益上の「収支得失」に余念が無ければ、当然「詩歌の歓呼」のように

「役に立たない事には何一つ関心を払わない」(註(29))のが普通である。ところが毛織物商人ランダウエルは異例であった。しかもこの稀有な「思慮深い家長」が常に「諸手を拵けて待つ」(註(25))「寛ぎと安らぎ(Zufriedenheit und Ruhe)」(註(3))の場が紛うことなき日常の現実として開かれていたればこそ、敢てこの日常性を窓として西欧意識の淵を彩る魂の歌声が次第に心を開き、あたかも生育する自然の如く充実した思索の力を展開することが出来たと思われるのである。

(3) ランダウエル絨毯毛織物商会

前述した実務家ランダウエルが思索家ヘルダーリンを庇護できた脈絡は、異質な魂が相互の違いを認めつつも歩み寄り対話し得た現実を物語るものである。この言わば調和ある対立(2)(1)の契機は思想詩「パンとぶどう酒」において、別に例えば「昼と夜」とか「古典ギリシアとキリスト教西欧」と云うように一見したところ水と油の如き矛盾対立が、何らかの相互対話を目指す経緯へと繋がる。蓋しこの脈絡はあくまで相互対話であり、所詮「対立」は解消されず統一されぬのであるが、しかし正に「対立」が形造る明暗が「調和」を仮象として樹立するのである。

つまり「思索家と実務家」(2)(5)のように、日常意識において「対立」しているものが、稀有な詩歌家徴の調べにより「調和」を目指しているのが、思想詩「パンとぶどう酒」の基本性格と考えられる。故に古典ギリシアの昼とキリスト教西欧の夜とか、或いは内面の精神界と外界の現実とかが、濃淡細やかな明暗を織り成し、この思想詩の中では減張ある平衡を獲ており、此所では決して或る唯一の原理が全体を丸く収め大団円をなすことはない。そしてこの中央集権ならぬ共和精神を体現し、敢て専制を厭う「パンとぶどう酒」の詩想は、幾重にも微妙な心の襞を織

り成しつつ、複雑な西欧キリスト者の意識の淵に深まり沈みゆくのである。

この専制を厭う共和精神を表明していると思われる具体的な詩節を思想詩の中に探すと、それは第三節の第四四句以下に見い出される。

……永遠に存続する規矩 (Maas)

四五 万人に普遍で、しかも各人各様 (の規矩) が定められ、

何処に往き来しようとも自由なのだ。

(「パンとぶどう酒」第三節、第四四句―第四六句)

この「規矩」は場合により、ルソー著「社会契約論」(一七六二年)に云う「普遍意志の至高の指導 (la suprême direction de la volonté générale)」とか、カント著「人倫の形而上学」(一七九七年)に云う「万人の心を合わせて一致した意志 (der übereinstimmende und vereinigte Wille)」とか、フィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」第十三講 (一八〇八年) に云う「精神界の彼の最高法則 (jenes höchste Gesetz der Geisterwelt)」などに遡求でき得る西欧近世市民社会形成原理と考えられるが、とにかくこの脈絡は「最高の共同が最高の自由である (Die höchste Gemeinschaft ist die höchste Freiheit)」(ヘーゲル) と要約でき得ると思われ。

この観点を物語るヘルダーリン自身の言葉としては思想詩「パンとぶどう酒」第八四句の「一にして全 (Eines und Alles)」とか、哲学長篇小説「ヒュペリオン」第一部 (一七九七年) に云う「ヘーラクレイトスの多様の一者 (eudialepteurty)」(第三〇書簡) とか、或いは一七九九年七月三日付ノイファー宛書簡にある「各個が固有の全体 (jeder ein eigenes Ganze ist)」などが考えられるが、恐らく一七九八年十二月二十四日付シンクレア宛書簡の次の一節が引用するに適切であろう。

かくしてまたそれ故に次のことが明らかである。各個が全体と親密に結びつき、この各個と全体との両者が唯一の生きた全体を形造る。だがこの全体は

徹底して個別化され、この個別の全く独立した諸部分から成り立ち、しかもこの諸部分は正にかく親密に何時までも結び合わされているのである。

これをシラーの戯曲「群盗」第二版 (一七八二年) 巻頭の扉絵下の言葉で示せば「暴君打倒 (in Tyrannos)」と政治色濃く表現できようし、また一七九三年二月二十三日付ケルナー宛ての所謂シラーの「カリアース書簡」によれば「美 (schön)」と一言で以てこれを蔽うことが可能であろう。

以上の如く思想詩「パンとぶどう酒」などに表明された「調和ある対立」なす共和精神を鑑みて、今度は詩人の友ランダウエルの商会経営を考え併せてみようと思ふ。果してこの経営形態が共和精神に適うものであったのか、或いはそれを裏切る専制形態であったのかが此所で問われることになる。この分析のための資料としては、一八二〇年に始めて設立された「統計・地誌局 (Statistisch-Topographisches Bureau)」が一八三二年に刊行した「ヴュルテムベルク年鑑 (Württembergisches Jahrbuch)」に収められた「ヴュルテムベルク王国内工場目録 (Verzeichniß der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken und Manufakturen)」が有効と考えられる。

この「ヴュルテムベルク工場目録」からは、「ランダウエル絨毯毛織物商会 (Landauerische Fußteppiche- und Wollwarenhandlung)」に関し次のことが解かる。

製品は絨毯。工場内労働者なく、工場外労働者八名。商会設立一七九七年。

此所に云う商会の製品たる「絨毯 (Fußteppiche)」の製作には、確かに相当な高度の技術が必要であったと考えられる。すると「工場外労働者八名」としては、恐らく織物職人の親方 (Webermeister) を考えるのが適切であろう。

ところで、このように在来の手仕事職人と新興の資産家とが手を結んでい
た当時の経営形態を、社会経済史上では「問屋制度 (Verlagssystem)」と
呼び、「個々の独立した手工業 (Handwerk)」と工場制手工業 (Manufaktur)
との間に位置する資本主義の発展段階¹⁵⁾と看做している。つまりこれは
資本主義勃興期に、殊に当該のヴェルテムベルクなど西南ドイツで見受
けられた経営形態であり、決して大規模な工場への集中形態ではない。
従って、一七九七年に新たに創設された「ランダウエル商会」において
は、資産家であった経営主クリスティアン・ランダウエルに対し八名の
手工業職人が全き従属関係に立たず、各々個人が固有の在り方を保持し
ながら相互に「調和ある対立」の様を呈していた可能性が高いと想像さ
れるのである。

すなわち「ランダウエル商会」を、工場制手工業の中で分類すると、労働
集中管理を旨とする中央集権型の「集合工場 (Manufacture réunie)」と
言うよりは、むしろその対をなす「分散工場 (Manufacture dispersée)」
と看做される¹⁶⁾。

幾百の人々が一人の経営主の下で働く大規模工場を、通常は集合工場
(vereinigte Manufakturen) と呼んでいる。……この集合工場 (Die
vereinigte Fabrik) は一人あるいは二人の企業家に巨万の富をもたす。
……他方、分散工場 (die getrennte Fabrik) では誰か一人が富
むのではなくて、多数の労働者が結構に暮らしてゆけるのである。

(マルクス「資本論」第一巻、一八六七年、第七篇
「資本の蓄積過程」第四章「いわゆる本源的蓄積」)

確かに「資本論」での精緻な分析を待つまでもなく、既に『百科全書
Encyclopédie』第一〇巻(一七六五年)では百百年前に、「集合工場」
に関して、

この大工場 (la grande manufacture) では、鐘を叩く一撃の下に全てが執

り行なわれ (tout se fait au coup de cloche) 職人は一層と拘束され手
荒く扱われている¹⁷⁾。

と巧みな比喩で叙述されており、他方また「分散工場」については、

この小工場 (le petit fabricant) では職人が親方の仲間 (camarade) で
あり、親方とは同僚 (son égal) との如く生活する。

と物語られている通り、「集合工場」の中央集権型専制が「分散工場」
の共和精神¹⁸⁾と好対称をなしている。そして取りも直さず「ランダウエル
絨毯毛織物商会」が、正にこの「分散工場」の一形態と看做されるので
ある。

当該の「思慮深い家長」の内実が以上の考察で経営上の出来事として
も確かめられたと思われる。つまり「思慮深い家長」は、このような経
済上での基礎をも踏まえて、更に稀有な詩人ヘルダーリンをも親友とし
て迎えることのできた手腕を有していたと考えられる。そして現実上の
この「思慮深い家長」の存在は、徐々に思想詩「パンとぶどう酒」全体
の世界へと協和なして響き渡ってゆくのであり、決して冒頭の都市像を
飾るに過ぎぬ詩想展開上の付け足しと解されてはならないのである。
「家長」とは既に述べたように「父 (Vater)」(2) (19) へと繋が
り、然り気なく「隠れて働き (Verborgenvirkend)」(2) (22) につ
づけていると思われる。そして何時とは無しに思想詩の基調へと靈妙に協
和してゆく。

Vater Aether erkannt jeden und allen gehört.

父なる神アイテルが誰にも知られ、万人のものとなる。

(「パンとぶどう酒」第九節、一五四句)

あたかも天空の大気の如く「父」たる「神自身」(2)(20)は「万人」に開かれており、「誰」の魂の心鏡にも満面を映す。此所に「思慮深い家長」(第四句)が心から反響する思想詩の淵源がある。この魂の淵源は果して「至福なるギリシア」(第五五句)に在る。つまり「在りて在る」⁽²¹⁾「ねたむ神」⁽²²⁾にのみ巨万の讚美歌が専有される中央集権化した「汝なすべし(Du-sollst)」の神界ではなく、十人十色の「神話の神(Gott der Mythe)」⁽²³⁾が矛盾を孕みつつも「調和ある対立」(2)(1)を織り成し、濃淡細やかな魂の明暗を彩る「神々の昼(Tag)」⁽²⁵⁾(第七二句)がこれであり、この「天上の祝祭(das himmlische Fest)」(第一〇八句)に自然と雄大に輝く「父なる神気アイテール(Vater Aether)」(註(20))の晴やかで清澄なる性格。

五五 Seeliges Griechenland!

..... tönest das große Geschick
..... brichts, allgegenwärtigen Glücks voll

六五 Vater Aether!

Vater! heiter!

五五 至福なるギリシアよ!

..... あの偉大なる運命が轟き、

..... あの神速の運命が砕け、普通の幸に満ちて、

六五 父なる神気アイテールよ!

..... 雷鳴とともに清澄なる大気から、眼界を過り突入して来る。

父よ! 清澄で晴やかな者よ!

(「パンとぶどう酒」第四節、第五五句―第六九句)

へと靈妙に木靈^{モウ}なして、当時十八世紀ドイツ史の現実社会から、氣宇壮大な「思慮深い家長」が稀有な詩歌象徴として「パンとぶどう酒」冒頭の都市像に立ち現われるのである。

(4) 共和精神と専制

前掲「ヴェルテムベルク工場目録」(3)(13)から「ランダウエル絨毯毛織物商会」の設立が「一七九七年」であることが確かめられた。この設立時期は当該の西南ドイツ地方シュヴァーベンにおいては決して遅いものではなく、むしろこの地方の資本主義勃興期を代表する先駆的企業として「ランダウエル商会」が一七九七年に創設されたと見受けられる。例えば当の「工場目録」によると、この一七九七年よりも早く設立された企業がシュトゥットガルトに見い出されなかったから、⁽¹⁾「ランダウエル商会」が手工業から工場制手工業(マヌファクトゥーア)へと進展する産業革命期に先駆けて設立されたことが肯けるのである。

実はこの産業革命期は同時に政治革命期でもあり、一七八九年に勃発したフランス大革命に続き、一八三〇年の七月革命、更には一八四八年のフランス二月革命やドイツ三月革命へと市民社会形成は、既成の中央集権封建体制に丸く収まった専制の殻を破り、新たな「調和ある対立」(2)(1)を実現すべく議会制民主共和制を目指して実質あるものと成ってゆく。これに先駆けドイツではフランス語とフランス文化の専制が、十八世紀後半期には完全に打ち砕かれ、「ドイツ音楽、殊にそのバッハからベートーヴェン、ベートーヴェンからヴァーグナーへの偉大なる日輪の歩み」(ニーチェ)を先頭にして、これに加えてカント批判哲学に始まりフイヒテ知識学からヘーゲル精神現象学へと雄飛する学問の充

実と、この学知と「音楽の精神」(註(一))に協和する詩歌象徴の調べなす思想抒情詩、とりわけ「芸術家」(一七八九年)や「エレゲイオン」(一七九五年)とか「パンとぶどう酒」(一八〇〇年—一〇一年)や「パトモス」初稿(一八〇二年)の如き、シラーやヘルダーリンの「魂の歌声 (Seelengesang)」が、外来文化に片寄せらぬフランス文化とドイツ文化との「調和ある対立」を実現する礎として据えられたのである。

本論の関心は当面、近世ドイツ産業革命における経済面へと向けられる。ところで既に当該の西歴一八〇〇年頃に文化面でドイツは心を一にし、敢て自らの充実を「ドイツ精神 (Der deutsche Geist)」⁽¹⁾と言い得る程の自覚に達していたのであるが、他方その外の経済や政治の面では小邦分立 (Kleinstaaten) ゆえに現実上まとまりの悪い実情を示していた。辛くも政治上の小ドイツ統一は一八七〇年に軍事力により漸く成し遂げられるのであるが、それに対して経済上のまとまりは一八三三年に成立した関税同盟 (Zollverein) が翌一八三四年から一八六七年にかけて実効を増してゆく経過を自安にすることができる。

すなわち当時は「ドイツ」と一言で云っても小邦分立の時代であり、今日ドイツと称する東独と西独との国土は凡そ三百程にも互る政治単位に分かれ、このうち五十程の帝国自由都市を除く二百五十程が領邦国家であり、この三百程が各々独自の関税を物品にかけていた模様である。従って、このドイツの中を商品が流通するとなると、幾重にも互る関税の網の目に捕われることになり、各小邦を経る毎に商品が割高となり経済流通が悪くなるのが実情であった。

この現状で得をしていたのが、北海に面していたハンザ都市の富豪と考えられる。すなわち海上では内陸のように関税がかからずに商品が運べ、何よりまず先進工業国ブリテン王国の織物製品がハンザ都市には容易に入手でき得た。そしてこの工業製品に対しては、東欧にかけての内陸穀倉地帯から農奴制や大農地主 (Junker) 制の下での安価な農産

物や畜産製品を交易のため運んで来れば良く、この後進農業地帯と先進工業国との間を仲介する中継貿易でハンザ都市の富豪は栄えていたのである。

かくして中継ハンザ海外貿易を軸とした経済活動は、一方で工業先進国の繁栄を一層と助長し飛躍的産業発展を大英帝国に専ら約束するとともに、他方では内陸部での旧封建体制の温床たる農業優位を決定ならしめ、内陸ドイツ独自の産業革命の進展を阻むものと看做される。この点を三月革命(一八四八年)前夜にエンゲルスが厳しく批判している。

イギリスは農産物を全く輸出しておらず、絶えず外国から輸入しなければならぬ。フランスは少くとも輸出するだけ輸入しており、この仏英兩國の富の源泉は就んずく工業製品の輸出である。これに対してドイツは工業製品をほとんど輸出しておらず、夥しい穀物、羊毛、家畜を輸出している。……農業の政治上の代表者は、他の欧州諸国と同様にドイツでも、大土地所有者たる封建貴族であり、この貴族の専制支配に適う政治形態が封建制度である。そしてこの封建制が解体した所はどこでも、農業が国の産業を決定しなくなつたのである。

(「ドイツの現状」一八四七年)

実に関税同盟成立(一八三三年)後の十九世紀中葉においても尚このような批判が妥当しており、文化面では既に啓蒙先進諸國の学芸成果を凌ぐ音楽や思索の力がカントやベートーヴェンの名声とともに確実な影響を諸外国に与えていたにも拘わらず、経済面において先進工業国とドイツとの「調和ある対立」はなお今後の大きな課題に留まり続けていたのである。

註みに「ドイツの現状 (Der Status quo in Deutschland)」(註(4))においてエンゲルスは封建貴族 (patriciatu feudalis) へのみ言及しているが、更に只今話題としたハンザ都市の富豪のような都市貴族 (patriciatu civilis) をも考え併せると、封建制の温床たる「農業の優位 (Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus)」(エ

ンゲルス)とともに中継ハンザ海外貿易に根ざした両貴族の勢力が、内陸ドイツ独自の工業発展を阻み仏英など産業先進国に対するドイツの後進性を裏付け、これら諸外国とドイツとの経済面における「調和ある対立」への努力に水を差す障壁となっていたと見受けられるのである。

この脈絡で興味深く思われるのは、思想詩「パンとぶどう酒」冒頭の都市像が形造られつつあった一八〇〇年秋十一月初旬に公刊されたフィヒテ著「封鎖商業国家論(Der geschlossene Handelsstaat)」である。

一見この書名「鎖国論」は「開国論」と比べる時、自由な通商を拒む時代後れの考えを論述した著作を思わせる。確かに当時アイルランドをも併合(一八〇一年)し海外植民地争奪戦に勝ちどきを挙げていた大英帝国の高度経済成長を積極的に評価するならば、通商の自由へと開国を促進しない理論は反動と映じる以外に術はない。なぜなら、「或る見えざる手により導かれ(Led by an invisible hand)(⁶⁾スミス「国富論」一七七六年)で巧妙に繰られていると思われる自由放任の経済活動こそが、正に「諸国民の富(The Wealth of Nations)」の源泉と考えられたからである。

それは商業精神(Handelsgeist)であり、この精神は戦争と共存し得ず、そして早晩どの国民をも支配するのである。⁶⁾

(カント「永遠平和のために」一七九五、補遺第一「永遠平和保証について」)

なるほど内陸東欧の穀倉地帯と大英帝国産工業製品との中継貿易で栄えていた海港都市ケーニヒスベルク在住のカントが、「永遠平和のために」「商業精神」を肯定したのも不思議とは思われない。

これに反して内陸ドイツの領邦ザクセンの寒村に貧しい織工の子として生まれたフィヒテは、「商業精神」による資本主義が正に帝国主義へと繋がり、「永遠平和のために」なるどころか、むしろ「この精神が戦争と共存し得る」⁷⁾「遍く見受けられる密やかな商業戦争(ein allgemeiner

geheimer Handelskrieg)」に他ならないと主張し、先師カントの平和論を敢て批判する。

この密やかな商戦は暴力行為へと繋がる。……相争う商業利害関係がしばしば諸々の戦争の真の原因であり、しかも口実は別に与えられるのである。

(フィヒテ「封鎖商業国家論」一八〇〇年、第二書「現代史」——目下現実の諸国家における通商状態について、第六章)

単に「商業利害関係(Handelsinteresse)」と云っても抽象的だが、此所で先程から話題とした大英帝国の経済発展に軍事拡張が伴っていた点を顧慮するならば、無制限の自由放任な商業精神を否定的に見直し「鎖国論」を説くフィヒテの主張に「理あることが解かるのである。

殊にエンゲルスの説くように、内陸ドイツにおける「農業の優位」(註(5))が封建制の残存する温床となり、しかもドイツが言わば大英帝国の商業資本の植民地として後進地域に甘んじねばならなかった当時としては、「ドイツ国民に告ぐ」第十三講(一八〇八年)でフィヒテが、

ドイツ人相互の一致とともに、国内の独自性と国内商工業の自立がそれにくぐ繁栄への道なのである。⁸⁾

と力説したのも観念でなく現実であったと看做され得よう。すなわち前述した北海ハンザと内陸ドイツとの対立から考えると、「ドイツ国内の独自性と国内商工業の自立」を生み出す母胎として、ドイツ内部での関税の徹底と内地工業の保護育成こそが、ドイツ産業発展を約束する具体策として思い浮かぶからである。

正にこの脈絡において、内陸ドイツの新興企業家であった毛織物商人ランダウエルの姿が浮かび上がって来る。すなわち一七九七年に創設されたこの商会の発展にとり、取りもなおさずドイツ内部での関税の徹底と内地工業の保護育成こそが鍵となるからである。果して実際に十九世

紀ドイツ史の現実はこの方向に向かい、次第にハンザ都市の中継海外貿易の意義は失なわれてゆき、その都市貴族はマン著「ブデンブローク家」(一九〇一年)に描かれた当家のように没落した模様である。そしてこの際十九世紀を通じて、ドイツ関税同盟が実現し、内地ドイツ独自の工業発展が促され、やがてドイツも仏英に追いつかんばかりの先進工業国に成長してゆくのである。

この十九世紀ドイツ資本主義の展開に伴なう産業革命の進展において、旧来の中継ハンザ海外貿易を動脈とした経済構造が崩れてゆき、これとともに内陸ドイツ独自の工業発展の時代が到来することになる。この新たな時代に先がけ一七九七年に、「思慮深い家長」が「ランダウエル絨毯毛織物商会」を設立したと考えられる。久しく中継ハンザ海外貿易を主軸として、ドイツには産業先進国から織物工業製品が内陸からの農産物と引き換えに流入し、ドイツは言わば大英帝国の植民地たる工業後進国に甘んぜねばならなかった。ところが、この新たなドイツ産業革命の時代には、経済上のこの専制を碎き、仏英など工業先進国との経済面における「調和ある対立」を目指し、ドイツ国内産業が育成されてゆくのである。そして、この産業革命の力が、先にエンゲルスの云う「貴族の専制支配」たる「封建制が解体」する母胎となつてゆくのであり、市民社会形成の原動力となつてゆくのである。

本論がヘルダーリンの思想詩「パンとぶどう酒」第四句に読んだ「思慮深い家長」ランダウエルの姿は、このような十九世紀資本主義西欧市民社会形成への展望の下に、一層と意義深く映じて来る。実際ドイツ文学史上の稀有の詩才をも温かく包容できたこの「実務家」の力量は、恐らく経済活動においては一層と巾広い視野と、祖国ドイツの遠い将来への見通しの下に發揮された事と思われる。

実際このことを裏書きするように、一七八七年に設立された「ランダウエル絨毯毛織物商会」は、その百年後一八九七年には「ランダウエル

兄弟株式会社 (Gebrüder Landauer-AG) へと成長している。これを示す資料が「一九三一年度会社設立記念目録 (Verzeichnis der Firmenjubiläen)」で此所に「ランダウエル兄弟株式会社」が「工場製品紳士淑女既成服商 (Manufakturwaren- Herren und Damen-Konfektion)」として記載されている。この「株式会社」への躍進の年一八九七年を機に商会は、新たな産業資本主義の時代に乗り出した模様である。

実はこの商会発展の十九世紀において、かつては前述(2)の如くシュトゥットガルト市の目抜き通り「ケーニヒ大路」と「学院通り」との交差するあたりに建っていた商館が、この領邦都市の心臓部たる広場の市場(マルクト)の南側(十七番地)へと移転して来ている。興味深いことに新たな商館の住所には、「パンとぶどう酒」成立の一八〇〇年頃の「門閥の館 (Herrenhaus)」があり、この特権の館がマルクト広場の西側にある「市民の館 (Rathaus)」つまり今日の市庁舎たる当時の民衆と睨み合っていたと想像される。そして市民社会形成とあいまって当然ながら「門閥の館」は一八二〇年に取り毀されたのに対し、当の市庁舎は今なおマルクト広場に聳えている。そしてその右隣に「ランダウエル兄弟株式会社」の商館が、「門閥の館」の取り毀された後に、十九世紀ドイツ産業革命の成果として建てられたと考えられるのである。

ところが、この後にドイツの政治史において異常な専制政体の下での反動期が訪れる。すなわち一九三三年に国家社会主義ドイツ労働党が政権を獲得し、その後まもなく一九三五年に再武装宣言を下す。すると直ちに「ランダウエル兄弟株式会社」に不幸が到来したのである。この経緯を伝える記録が、次に掲げる「シュトゥットガルト市年代記 (Chronik der Stadt Stuttgart) 一九三三年—四五年」つまり国家全体主義体制下ドイツ史の一齣である。

一九三六年、市参事会員プロイニンガートの通達、ランダウエル兄弟株式会社は直ちにアーリア系（反ユダヤ系）企業に変わるべし。

一九四二年三月十二日、シュトゥットガルト市秘密国家警察の通告、ルイ・イスラエル・ランダウエル（一八五八年—一九四〇年）の家財、シュトゥットガルトに残る住居は、民族と国家に敵対する企ての促進に使われ、そのためのものと定められた。故にルイ・イスラエル・ランダウエルのドイツ国内における資産は、第三帝国の（繁栄の）ために没収される。¹⁰⁾

かくして啓蒙期十八世紀末一七九七年に新たな産業革命の勃興を告げ、詩人ヘルダーリンの友クリスティアン・ランダウエルによる共和精神の下に基礎が据えられた商会は、翌十九世紀に株式会社へと躍進し、創業以来百五十年程も続いたにも拘わらず、最後には無惨にも国家社会主義すなわち全体主義の専制の手先たる秘密国家警察により蹂躪され、遺徳ながら今日ではドイツの国土から姿を消してしまったのである。

例えば「ヘルダーリン年代記」（一九七〇年）における解説において、詩人の伝記に関する第一人者アドルフ・ベックは、クリスティアン・ランダウエルに關し、

政治上ランダウエルもまた共和主義者（Republikaner）であり民主主義者（Demokrat）であった。¹¹⁾

と叙述して、詩人と同様に毛織物商人「もまた（auch）」政治上民主共和制の支持者であった旨を物語っている。この脈絡からしても、全体主義専制下での「アーリア系」ドイツ「民族と国家に敵対（volks- und staatsfeindlich）する企ての促進」（註（13））にランダウエル家が一翼を担ったのも、商会百五十年に亘る家風から自ずと理解でき得るのであり、此所にも封建制から市民社会形成へと思想面のみならず経済面でも活躍した「思慮深い家長」の面影が偲はれるのである。

(5) 結 語

本論が「パンとぶどう酒」第四句の詩歌象徴「思慮深い家長」の背景に見た史上の毛織物商人ランダウエルは、これまでの考察から「共和主義者であり民主主義者」（4）（16）であったのみならず、実は末裔が国家全体主義体制の下で無惨にもその専制の手先たる秘密国家警察に蹂躪されたユダヤ系ドイツ人（4）（13）であった。推測であるがランダウエル家はライン河西岸を少し入った中世以来ユダヤ人の住んだ町ランダウに由来するのではないかと思われる。成程「マイヤー百科事典」第十四卷（一九七五年）所収の「プファルトツのランダウ（Landau in der Pfalz）」の項には一九〇七年から一九一一年にかけて建立されたカトリック教会が掲げてあるのみであるが、他方エルサレムで刊行された『百科事典ユダイカ（Encyclopaedia Judaica）』（一九七一年初版、一九七三年再版）第一〇巻に収められた「ランダウ」の項には「一八八四年建立ドイツのランダウのユダヤ教聖堂（シナゴーク）が、一九三八年（十一月九日から一〇日にかけてユダヤ人大虐殺の行なわれた）水晶の夜（Kristallnacht）に国家社会主義者（ナチ）により破壊された」との記述とともに当時の大聖堂が写してある。

このようにユダヤ問題が今日ドイツでは余り積極的に扱われないのも不思議ではあるまい。なお国家全体主義下での暗黒時代の残影は長く尾をひいている。しかしながら学会の権威ある「ヘルダーリン年代記」（一九七〇年）において、「政治上ランダウエルもまた共和主義者であり民主主義者であった」（4）（16）と記述するのみで、このランダウエル家がユダヤ系であった旨に言及していないのは恨みとせざるを得ない。恐らくその筋の人々にとり、この事は自明のことかも知れない。蓋

しわが国のようにその事情に通じない者には解明されねば隠蔽されたままに留まらざるを得ないのである。

考えてみるに「ユダヤとドイツ」との出会いとして「ランダウエルとヘルダーリン」の友誼を見ると、此所で実に異質な魂同志が邂逅するのを眼の当りとすることになる。なぜなら他の詩人たちを措き、ヘルダーリンこそ正にゲルマニア風ドイツ詩人の典型と考えられるからであり、数十年前に国家全体主義が水と油の如く決して和睦せぬ二律背反と解し「あれかこれか」を迫った両極「ユダヤとドイツ」が、このゲルマニア風ドイツ詩人とユダヤ系商人ランダウエルとの織り成す稀有な詩歌象徴「思慮深い家長 (ein sinniges Haupt)」として「調和ある対立」を形造るからである。そして正にこの相反する者同志の相互対話(ディアレクティケ)こそが、「パンとぶどう酒」の詩想の基本性格をなし、更には古典ギリシアとキリスト教西欧との矛盾対立をも孕みつつ豊かで中広い思想を大胆に力強くしかも濃淡細やかに展開してゆくのである。

ところで、このような抒情思想詩の生成を支えていたのは、単に増長した詩人の頭脳ではなく、その詩人の現存を底で温かく迎えていた親友ランダウエルの如き市民層の寛大な心持ちであったと考えられる。そしてこの新たに勃興しつつあった市民意識の経済地盤は取りも直さず産業革命の進展に他ならなかった。その市民意識を担うユダヤ系ドイツ商人として詩人の友ランダウエルは、自己の経済面における実力を堅実に進展するドイツ市民社会形成へと振り向け、この近代社会における民主共和制実現を目指してドイツ市民層とともに倦まず歩み続けたと考えられるのである。

つまり豪商ランダウエルは宮廷と結託せずに「共和主義者であり民主主義者」(4)(16)として市民層とともに未来を指したと思われる。これに反して未だ経済成長なき封建制下での当領邦ヴェルテムベルクで

は、裕福なユダヤ系豪商ヨゼフ・ジュス・オッペンハイマー(一六九二年—一七三八年)³⁾が、いわゆる宮廷ユダヤ人(Hofjude)として重用され枢密財政顧問官(Geheimer Finanzienrat)にまで出世し人々の羨望の的となり、挙げ句の末は政権交代を機に一七三八年二月四日に公衆の面前で絞首刑にされている。当時は恐らく宮廷に取り入るのがユダヤ系豪商の実力を発揮する最も有効な道だったのである。だがフランス大革命勃発(一七八九年)後の産業革命進展の中においては事情が異なり、「思慮深い家長」ランダウエルのように生育し発展する市民社会と歩みをともしながら、稀有の詩才をも庇護し得たユダヤ系豪商が出現し得たのである。

故に「思慮深い家長」ランダウエルが、在来の啓蒙期における専制支配、いわゆる啓蒙専制の「家父長的統治(väterliche Regierung)」に組するとは考え難い。なぜならカントが「理論上は正しくとも実践で役立つ」と云う俗説について(一七九三年)と云う論文で述べているように、

言わば子供たちに対する家父長権の様な、国民に対する好意(Wohllollen)の原理に基ずくが如き統治、すなわち家父長的統治(imperium paternale)では従って臣民が、自らにとり真に何が有益か有害かを判断できぬ未成年の子供同然で、全く受動的に振舞わざるを得ず、如何に幸福たるべきかに関しては専ら国家元首の判断を、またこの元首が何を欲しようとも専らその親切を期待するのみであり、このような家父長的統治は考えられる限り最大の専制支配(Der größte denkbare Despotismus)である。⁴⁾

と判断されるからで、政治上のみならず経済面においても上述の如き「共和主義者であり民主主義者」であり得た「思慮深い家長」は、旧封建体制下での啓蒙専制の範型なす「家父長的統治」に代わる新たな人倫統治のあり方を求めていたと思われるのである。

この要請に応える政治上の特筆すべき出来事が、フランス大革命下で

の王制廃止、すなわち共和制 (Republique) 樹立 (一七九二年九月) と旧国王ルイ斬首 (一七九三年一月) であった。殊に諸外国の「家父長的統治」が皆この共和国フランスを敵視し、反動勢力として結託し王政復古を目指した結果として、四面楚歌のフランス人民は祖国 (patrie) のために自ら進んで抗戦した。つまり心の内からの必然により、何ら或る「家父長」の命令に依存しない「祖國的統治 (vaterländische Regierung)」が此所に誕生したと見ることが出来る。

家父長的な祖國的統治 (imperium non paternale, sed patrioticum) のみが正に、諸権利の資格ある市民のため、同時に統治者の好意を顧慮して考え出され得る唯一のものである。祖國的 (Patriotisch) とは、つまり国民の誰もが (国家元首も例外とせず) 公共体を母なる懐と、或いは国土を父なる大地と看做す考え方であり、この生まれ育った祖国を誰もがまた言わば貴重な遺産として後世に残さねばならないと言える。それは取りも直さず各人が自らの諸権利を公共体の (普遍) 意志に拠る諸立法により守るためであり、決して統治者の無制限な (絶対) 恣意に従属する事態を正当とは看做さないのである。

このようにカントは「俗説について」の論文において、「祖國的統治」を「家父長的統治」に對置せしめている。

恐らくこの「家父長的な祖國的統治 (Nicht eine väterliche, sondern eine vaterländische Regierung)」の原理は、正に冒頭の詩歌象徴「思慮深い家長」のみならず、この思想詩「パンとぶどう酒」の作品全体の基調と協和しうる指導理念であろう。すなわちユダヤ系ドイツ人ランダウエルが社会経済面において「祖国」ドイツ市民社会形成に力を尽したとすれば、この豪商の友ヘルダーリンこそ、他の諸々の詩人たちが例えばシラーやゲーテにも増して「祖国 (ドイツ)」の詩歌の崇高で純粋な歓呼 (das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge) (2) (2) を目指し達成した歌人と看做されるからである。

註 解

(四) 思慮深い家長

(1) 緒 言

- (1) 「ドイツ精神史における登頂前夜ホームブルク」一九八一年「序言」一七頁。
- (2) 和訳ヘルダーリン全集、河出書房新社、一九六六年—一九六九年、第二巻、一〇九頁。
「抜かりのない商人はわが家にくつろいでその日の損益を思いはかる。」(第四句—第五句)
- (3) 「パンとぶどう酒」冒頭の都市像、高知大学学術研究報告第三十二巻、人文科学、一九八四年三月刊、(三)市民 (1)市民生活、三八頁—三九頁。
- (4) 仏訳ヘルダーリン作品集、プレヤード版、一九六七年、八〇八頁、ルイイ訳
- (5) 伊訳ヘルダーリン詩集、エイナウディ叢書三三、一九六三年、一〇一頁、ヴィゴロ訳。
- (6) 独英対訳ヘルダーリン「詩歌と断片」一九八〇年、ハンバーガー訳、二四三頁。
- (7) シンチンガー編「ドイツ詩集」第三書房、一九六九年、一二九頁。
- (8) ヘルダーリン全集、シュトゥットガルト版、一九四六年—一九七七年(索引一九八五年)、第二巻、九〇頁。
- (9) 「一八〇〇年頃の悲哀と理想——ヘルダーリンの悲歌作品研究」一九八二年、三〇頁。
- (10) 全集、第二巻、九〇頁。
- (11) 全集、第二巻、九〇頁。
- (12) 「ドイツ詩集」(註(7)) 一二九頁。

(1) 親友ランダウエル

- (0) 全集、第二巻、九〇頁。
 - (1) 「詩歌精神の方法論」。全集、第四巻、二六〇頁。
 - (2) 全集、第六巻、四三六頁。一八〇三年十二月付ヴィルマンズ宛書簡二四五。
 - (3) 全集、第六巻、三九八頁。母宛書簡二一〇。
 - (4) 全集、第二巻、一一四頁。
 - (5) 全集、第六巻、二二八頁。弟宛書簡二二六。
 - (6) 全集、第七巻、第二分冊、三九二頁。母の遺書(一八二二年九月二十日付)の記述より。
 - (7) 註(5) 弟宛書簡、二一八頁。
 - (8) 全集、第六巻、三九五頁。母宛書簡二〇六。
 - (9) 全集、第六巻、三九七頁。母宛書簡二〇九。
 - (10) 全集、第六巻、三九八頁。母宛書簡二一〇。
 - (11) 全集、第六巻、四〇一頁。妹宛書簡二二五。
 - (12) ゲーテ「ファウスト」結句(第一二二一〇句)。ハムブルク版作品集、一九八二年、第三巻、三六四頁。
 - (13) 全集、第六巻、二〇五頁。書簡一一八。
 - (14) 全集、第二巻、九四頁。
 - (15) 「パンとぶどう酒」第三部「西欧(ヘスベリア)の夜」(第七節—第九節)参照。
 - (16) 全集、第二巻、一一三頁。「母なる大地に」。
 - (17) 全集、第二巻、九二頁。
 - (18) ニーチェ「悲劇の誕生」一八七二年。
 - (19) 全集、第二巻、九四頁。第八節。
 - (20) 全集、第二巻、九三頁。第六節。
 - (21) 「新約聖書」「マタイ福音書」第二六章、第二六節—二九節。「マルコ福音書」第四章、第二節—第五節。
 - (22) 全集、第一巻、二七八頁。「婚礼前のエミリア」第三〇句。
「旧約聖書」「イザヤ書」第四章、第十五節「隠れた神 (Deus absconditus: ein verborgener Gott)」参照。
 - (23) 全集、第六巻、三〇七頁。弟宛書簡一七一。
 - (24) 全集、第六巻、二八九頁。書簡一六七。
- 他方詩人の「凡俗嫌」(Odi profanum vulgus) (ホラーティウス「歌章」)

第三卷、第一歌、第一句。作品集、トイブナー古典叢書、一九七〇年、六五頁。「少無適俗韻（少きより俗に適うの韻、べなく）」（岩波中國詩人選集、第四卷、一海知義注「陶淵明」一九五八年、二五頁）参照。蓋し「凡俗」とは「聖域を濫す世俗の徒」（前記「歌章」藤井昇訳、現代思潮社、古典文庫、第四七卷、一九七三年、一一五頁）と解され得る「穢土」でもある。

(25) 全集、第七卷、第一分冊、一六九頁。

(26) ベック／ラーベ共編「ヘルダーリン年代記」一九七〇年、三七二頁—三七三頁。

(27) 「ヘルダーリンの交友圈」一九七五年、八六頁。

(28) 作品集、第七卷、三七頁。

(29) 作品集、第七卷、二八七頁。

(3) ランダウエル絨毯毛織物商会

(1) 全集、第二卷、九一頁。

(2) 全集、ブレヤード版、第三卷、一九六四年、三六一頁。「社会契約論」第一編 第六章。

「われら構成員の各人が自己の人格および能力を公に委ね、普遍意志の至高の指導の下に置く。そして我々は各構成員を、全体から分ち難い部分として、皆一緒に受けとるのである。」
「つまり各人が自己を皆のものとしつつ、誰にも自分を譲渡しないのである。」

(3) アカデミー版に拠る作品集、一九六八年写真複製版、第六卷、三二三頁。
「それゆえ各人が万人に関し万人が各人に関し正に同一の決定をする限りでの、万人の心を合わせて一致した意志に、すなわち公民の一致した普遍意志のみに立法権がある。」

(4) 作品集、一八四五年—一八六六年版に依る写真複製版、一九七一年、第七卷、四六七頁。
「精神の本性は人類の本質を偏に最高度に多様な諸段階をなし、各々個人においても、また大きな全体としての個体、つまり諸国民においても表現し得た。あたかも各国民が自己を頼みとし、自らの固有性に従い、また更にこの国民に属する個人が、国民共通の固有性ととも自らの特殊な固有性に従い、自己展開し自己形成する丁度そのように、神性の現象は自ら固有の鏡に自己を映し出すのである。」

(5) 作品集、一八三三年—一八四五年版に拠る、一九六九年—一七一年、第二卷、八二頁。「フィヒテ哲学体系とシェリング哲学体系の差異」（一八〇一年）「フィヒテ体系の叙述」

(6) 当該の詩節を「自由」に関して私は既に、「至福なるギリシア」（第五五句）を指す「空無を孕む内面の飛翔」において考察した。詳細は高知大学学術研究報告（一九八五年度）第三四巻の人文科学篇所収（一頁—七二頁）の筆者の別論、ヘルダーリンの西歐ギリシア論——「至福なるギリシア」（一九八六年三月刊）のうち（三）「神話の神、殊にその（9）堅固に留まる一者」を参照。

(7) 全集、第二卷、九二頁。

(8) 全集、第三卷、八一頁。

(9) 全集、第六卷、三三九頁。書簡一八三。

此所に云う「各個が固有の全体」とは、「威厳ある悲劇形式」における「音調（トーン）の各個が固有の全体」のことである。なぜなら、「この詩歌諸形式のうち最も厳格な悲劇形式が焦眉の急として目指す点が、如何なる飾り気もなく、各個が固有の全体をなす濁りなき偉大な諸音調が十中八九、諧調なして転移しつつ進展すること」に他ならないから。

(10) 全集、第六卷、三〇一頁。書簡一七一。

(11) 全集、ヴァイマル版、第三卷、一九五三年、三四四頁と三四五頁との間。

この「暴君打倒」は欧文註に掲げたアイスキュロス「ペルシア人」第二四句など古代ギリシア都市國家の民主思想へと遡求でき得る。

(12) 五卷本ハンザー版全集、一九六五年—一七六年、第五卷、四二二頁。美学芸術論集、石原達二訳、富山房百科文庫、一九七七年、六四頁。

「ある風景が美しく構成されるといふのは、その個々の部分が互にはたらかきあって、各自がみずからその限界を置き、全体を個々の部分の自由の結果であるようにする場合です。風景のなかのすべての部分が全体に関係づけられていながら、なお各自固有の規則に従い、自分だけの意志に従っているかのように見えなければなりません。」

(13) シュトゥットガルト市史料編纂所 (Stadtarchiv) 所蔵。詳みにこの「工場目録」の記載は邦語文献、松田智雄著「ドイツ資本主義の基礎研究」（岩波書店、一九六七年）にも採られているが、しかし恐らく写し間違いか誤植ゆえに、「ランダウエル商会」が「ン」を「ウ」とした「ラウダウエル商会 (Ch. Laudauer, F.)」(三七五頁) として紹介されている。

- (14) 右記シュトゥットガルト市史料編纂所蔵「シュトゥットガルトの会社名簿 (Stuttgarter Firmenbuch) (一八三三年) に記載。
- (15) 「マイヤー百科事典、第二四卷、一九七九年、四八四頁、「問屋制度」の項。
- (16) この「集合工場」と「分散工場」の二分類は、デイドロ編『百科全書 (Encyclopedie)』第一〇卷(一七六五年)所収の「マニファクチュール」の項(六〇頁左段―六二頁左段)に拠る。詳細にマルクス「資本論 (Das Kapital)」第一卷(一八六七年)の第七篇・第二四章には、「革命の獅子ミラボー」の言葉として「集合工場 (manufacture réunie あるいは fabrique réunie)」と「分散工場 (fabrique séparée)」が挙げられている(マルクス・エンゲルス全集、第三卷、一九六二年、七七五頁―七七五頁)。尚『百科全書』原典は高知大学附属図書館所蔵の貴重本を用いた。
- (17) 右記(註(16))全集、第三卷、七七四頁―七七五頁におけるミラボーよりの引用。
- (18) 右記(註(16))『百科全書』第一〇卷、六一頁左段。
- (19) 詳細に『百科全書』第一〇卷で「工場制手工業」に関し、その「分散工場」について語られた共和精神は同時に、編集長ティドロを中心にして諸学者が協力した当の『百科全書』そのものの基本姿勢でもあった。
- 「学術団体のさまざまな対象だけでなく、人知の全領域にわたることのよ
うな企画を実施すること、これこそ『百科全書』の果すべき役目である。
この事業は、それぞれ別個に各自の専門に専心しながら、同時に人類共通
の利害と相互の善意によって結ばれた文筆家・技芸家の結社によりはじ
めて実施に移されることになるだろう。……私は、これら有能の士がそ
れぞれ別個にあることを望む。……各自が各自の行ないを誇りとし、熱
意を燃やす。」「『百科全書』第五卷、一七五五年、ティドロ執筆「百科
全書」の項、六三六頁右の左段。法政大学出版局刊「ティドロ著作集」
第二卷、一九八〇年、「百科全書」より「百科全書」の項、中山毅訳、
九二頁。
- (20) 全集、第二卷、九五頁。
- (21) 「我は在りて在る者であるぞ(エヒイエ・アッシュェル・エヒイエ)。」
『旧約聖書』「出エジプト記」第三章、第一四節。シュトゥットガルト
版原典へブライ語聖書、ドイツ聖書協会刊、一九八四年、八九頁。
- (22) 「ねたむ(カンナー) 神」(『旧約聖書』「出エジプト記」第二〇章、

- 第五節、第三四章、一四節。右記(註(21))原典聖書、一一九頁。一四
四頁。その他「申命記」第四章、第二四節。第五章、第九節。第六章、第
一五節。右記原典聖書、二九二頁。二九四頁。二九七頁。尚この「ねた
む神」は同時に「生ける(ハイム) 神(エロヒム)」「(申命記」
第五卷、第二六節。右記原典聖書、一四六頁)たる「在りて在る者」
(註(21))である。「カンナー(eifersüchtig)」の語彙に関しては、
ゲゼニウス「旧約(ブライ語・アラム語)中型辞典 (Handwörterbuch)」
第一七版、(一九一五年)七二七頁参照。
- (23) ニーチェ「ツアラトウストラはこう語った」第一部、第一章「三段の
変容」において、西歐キリスト教倫理を一言で以て蔽ったもの。批判版作
品全集、第六部、第一卷、一九六八年、二六頁。
- (24) ヘルダーリン「宗教論 (Über Religion)」一七九九年。全集、第四
卷、二八一頁。
- (25) 全集、第二卷、九二頁。「パンとぶどう酒」第二部「ギリシアの日」
を、その第四節でこう「神々の日(昼)」と呼ぶ。
- (26) 全集、第二卷、九三頁。右記(註(25))「ギリシアの日」を、その第
六節でこう命名する。
- (27) 全集、第二卷、九二頁―九三頁。
- (4) 共和精神と専制
- (1) 「音楽の精神からの悲劇の誕生」(一八七二年)第十九章。批判版作
品全集、第三部、第一卷、一九七二年、一三三頁。「同じ源泉から溢れ出
ずるドイツ哲学の精神」(同章、一二四頁)。
- (2) 「ドイツの歌」第一五句―第二〇句。
一五
そして緑濃き木蔭に深く坐し、
また頭の上で微風に榆の木立ちが戦ぐと、
涼しく息吹く小川に佇ずみドイツの詩人は
かた歌うのだ、もし明鏡の水面から
しかと飲みほすと、遠い彼方へと静聴する耳をそばだて、
二〇 魂の歌声を(奏でるのだ)。(全集、第二卷、二〇二頁)
- (3) この「ドイツ精神」を自覚した当時の代表として此所ではフィヒテ
(一七六二年―一八一四年)を挙げておこう。実に一七九九年五月二十二
日付ライオンホルト宛書簡でフィヒテ自ら「もし何らかドイツ精神が救われ
得るなら、私が告ぐ (mein Reden) ことにより救われ得る」(バイエル

ン学術アカデミー編フイヒテ全集、一七九六年―一九九年往復書簡集、一七二二年、三五五頁」と表明している程であり、しかもこれが空言でなかったことが「ドイツ国民に告ぐ (Reden an die deutsche Nation)」(一八〇七年―一〇八年) で明らかに確かめられるからである。

(4) マルクス・エンゲルス全集、第四巻、一九六四年、四四頁。

(5) 右記全集、第四巻、四四頁。

(6) 『国富論』(初版一九〇四年刊二巻本) 第三版、一九二二年、第一巻、四二―四三頁。第四書「経済学諸体系論」第二章。

(7) 『諸国民の富の本質と諸原因の探求』が「国富論」と訳される書物の原題である。

(8) 作品集(3)(3) 第八巻、三六八頁。

(9) 作品集(3)(4) 第三巻、四六八頁。

(10) 作品集(3)(4) 第七巻、四六七頁。

(11) 前掲(3)(13) 市史料編纂所所蔵。

(12) クレーナー版「ドイツ史跡都市案内」第六巻「バーデン・ヴェルテムベルク」一九六五年、六五七頁、欧文註掲載市街図7参照。

(13) 前掲(3)(13) 市史料編纂所所蔵。

(14) 厳密に云うと、商会創設はクリスティアン・ランダウエル(一七六九年―一八四五年)の父ゲオルグ・フリードリヒ・ランダウエル(一七三四年―一八〇〇年)の手になるが、実質上の礎は子が固めたと考えられる。

(15) 例えば前掲(1)(8) 全集の第六巻と、第七巻(全四冊)に収められた書簡・資料集編纂のまとめ役がベックである。

(16) ヘルダーリン協会刊「ヘルダーリン年代記」(2)(26) 一九七〇年、三八九頁。

結 語

(1) マイヤー百科事典、第十四巻、一九七五年、五八四頁。

(2) 百科事典ユダイカ、再版、一九七三年、一三八五段。
「ユダヤ人が最初に言及されるのが、ランダウでは十三世紀末で、ユダヤ人街 (Judenasse) は一三三九年に記録されている。」(一三八四段)

(3) 山下肇「近代ドイツ・ユダヤ精神史研究」有信堂、一九八〇年、六三頁参照。

(4) 作品集(3)(3) 第八巻、二九〇頁―二九二頁。

(5) 作品集(3)(3) 第八巻、二九二頁。

Stuttgart, Marktplatz.



Das Geschäft der Brüder Landauer am Marktplatz Nr.17 führte Manufakturwaren (1905). (Stuttgart Kulturamt-Stadtarchiv)

(昭和六一年・一九八六年六月四日受理)
(昭和六一年・一九八六年十一月二八日発行)

13)Chronik der Stadt Stuttgart. 1933-45.

1936 Ratsherr Breuninger berichtet: Die Firma der Brüder Landauer soll demnächst in ein arisches Unternehmen übergehen.

12.III.1942 Die geheime Staatspolizei Stuttgart gibt bekannt, daß das Vermögen des Louis Israel Landauer(1858-1940), letzter Wohnsitz in Stuttgart zur Förderung volks- und staatsfeindlicher Bestrebungen gebraucht und bestimmt war. Daher werden die inländischen Vermögenswerte des Louis Israel Landauer zu Gunsten des D. Reiches eingezogen.

14)Georg Friedrich Landauer(1743-1800). Christian Landauer(1769-1845).

15)Beck, Adolf(Herausgeber): Hölderlins Stuttgarter Ausgabe(IV(1)11). Bd.6 und Bd.7(4 Teile): Briefe und Dokumente.

16)Hölderlin: Eine Chronik in Text und Bild(IV(2)26). S.389.

Politisch war auch er Republikaner, Demokrat.

(5) SCHLUSSWORT

1)Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Mannheim. Bibliographisches Institut. Bd.14. 1975. S.584. Vgl. IV(3)15.

Landau in der Pfalz. Die kathorische Pfarrkirche Mariä Himmelfahrt wurde 1907-11 im neuromanischen Stil erbaut

2)Encyclopaedia Judaica. Jerusalem. Keter. 1971. 2.Aufl. 1973. Bd.10.

Jews were first mentioned in Landau in the late 13th century. A Judengasse is noted in 1329. (Sp.1384/Sp.1385) The synagogue of Landau, Germany, built in 1884 and destroyed by the Nazis on Kristallnacht, 1938.

3)Yamashita, Hajime: Studien zur neuzeitlichen Geistesgeschichte des deutschen Judentums. Yushindo. 1980. S.63.

4)Kant „Über den Gemeinspruch: Das mag in der Theorie richtig sein, taugt aber nicht für die Praxis“(1793): AT(IV(3)3). Bd.8. S.290-291.

Eine Regierung, die auf dem Princip des Wohlwollens gegen das Volk als eines Vaters gegen seine Kinder errichtet wäre, d.i. eine väterliche Regierung (imperium paternale), wo also die Unterthanen als unmündige Kinder, die nicht unterscheiden können, was ihnen wahrhaftig nützlich oder schädlich (S.290/S.291) ist, sich bloß passiv zu verhalten genöthigt sind, um, wie sie glücklich sein sollen, bloß von dem Urtheile des Staatsoberhauptes und, daß dieser es auch wolle, bloß von seiner Gütigkeit zu erwarten: ist der größte denkbare Despotismus (Verfassung, die alle Freiheit der Unterthanen, die alsdann gar keine Rechte haben, aufhebt). Nicht eine väterliche, sondern eine vaterländische Regierung (imperium non paternale, sed patrioticum) ist diejenige,

5)Kant: op. cit. S.291.

Nicht eine väterliche, sondern eine vaterländische Regierung (imperium non paternale, sed patrioticum) ist diejenige, welche allein für Menschen, die der Rechte fähig sind, zugleich in Beziehung auf das Wohlwollen des Beherrschers gedacht werden kann. Patriotisch ist nämlich die Denkungsart, da ein jeder im Staat (das Oberhaupt desselben nicht ausgenommen) das gemeine Wesen als den mütterlichen Schooß, oder das Land als den väterlichen Boden, aus und auf dem er selbst entsprungen, und welchen er auch so als ein theures Unterpfand hinterlassen muß, betrachtet, nur um die Rechte desselben durch Gesetze des gemeinsamen Willens zu schützen, nicht aber es seinem unbedingten Belieben zum Gebrauch zu unterwerfen sich für befugt hält. - Dieses Recht der Freiheit kommt ihm, dem Gliede des gemeinen Wesens, als Mensch zu, so fern dieser nämlich ein Wesen ist, das überhaupt der Rechte fähig ist.

7) Vgl. IV(4)6.

8) Kant „Zum ewigen Frieden“ (1795) 1. Zusatz. Von der Garantie des ewigen Friedens.: AT(IV(3)3). Bd.8. S.368.

Es ist der Handelsgeist, der mit dem Kriege nicht zusammen bestehen kann, und der früher oder später sich jedes Volks bemächtigt.

9) Fichte „Der geschlossene Handelsstaat“ (1800) II. Buch. Zeitgeschichte – Vom Zustande des Handelsverkehrs in den gegenwärtigen wirklichen Staaten. 6. Kap.: Werke(IV(3)4). Bd.3. S.468.

Es entsteht zu der feindseligen Tendenz, welche ohnedies alle Staaten gegen alle wegen ihrer Territorial-Grenzen haben, noch eine neue um das Handelsinteresse; und ein allgemeiner geheimer Handelskrieg.

Dieser geheime Krieg geht in Thätlichkeiten über, und in solche, die nicht ehrenvoll sind. Man befördert den Schleichhandel in benachbarte Länder, und muntert ihn wohl öffentlich auf. – Das streitende Handelsinteresse ist oft die wahre Ursache von Kriegen, denen man einen anderen Vorwand giebt.

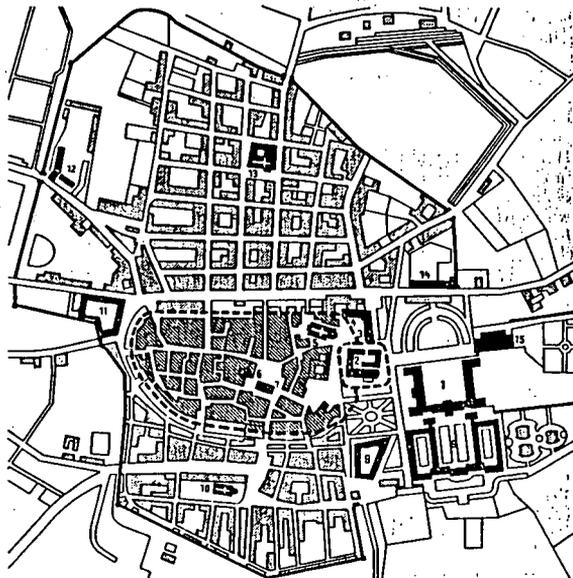
10) Fichte „Reden an die deutsche Nation“ 13. Rede: Werke(IV(3)4) Bd.3. S.466-467. Vgl. „jenes höchste Gesetz der Geisterwelt“ (IV(3)4).

Möchten wir endlich einsehen, dass alle jene schwindelnden Lehrgebäude über Welthandel und Fabrication für die Welt zwar für den Ausländer passen, und gerade unter die (S.466/S.467) Waffen desselben gehören, womit er von jeher uns bekriegt hat, dass sie aber bei den Deutschen keine Anwendung haben, und dass, nächst der Einigkeit dieser unter sich selber, ihre innere Selbstständigkeit und Handelsunabhängigkeit das zweite Mittel ist ihres Heils, und durch sie des Heils von Europa.

11) Verzeichnis der Firmenjubiläen. 1931.

Gebrüder Landauer-AG: Manufakturwaren- Herren und Damen-Konfektion. Stuttgart. Marktplatz 17. 1897ff.

12) Handbuch der historischen Stätten Deutschlands. Bd.6: Baden-Württemberg. Stuttgart. Kröner. 1965. S.657.



- 1 Neues Schloß
- 2 Altes Schloß
- 3 Kanzleigebäude
- 4 Prinzenbau
- 5 Stiftskirche
- 6 Rathaus
- 7 Herrenhaus, 1820 abgebrochen
- 8 Waisenhaus
(Institut für Auslandsbeziehungen)
- 9 Akademie
(ehem. Hohe-Carls-Schule)
- 10 Leonhardskirche
- 11 Legionskaserne
(Schillers Kaserne)
- 12 Rotebühlkaserne
- 13 Hospitalkirche
- 14 Reitschule, jetzt Königsbau
- 15 Opernhaus

1287

1794

3) Fichte: Gesamtausgabe. Bayerische Akademie der Wissenschaften. III: Briefband. Bd.3. S.353-363: Brief an Karl Leonhard Reinhold. 22.Mai.1799.

Ich darf jetzt nicht verstummen; schweige ich jetzt, so dürfte ich wohl nie wieder an's Reden kommen. - Es war mir, seit der Verbindung Rußlands mit Österreich schon höchst wahrscheinlich, was mir nunmehr durch die neusten Begebenheiten, und besonders seit des gräßlichen Gesandtenmords (über den man hier jubelt, und über welchen Schiller, u. Goethe ausrufen: so ist's recht, diese Hunde muß man todschlagen) völlig gewiß ist, daß der Despotismus sich von nun an mit Verzweiflung vertheidigen wird, daß er durch Paul, u. Pitt consequent wird, daß die basis seines Plans die ist, die Geistesfreiheit auszurotten, und daß die Deutschen ihm die Erreichung dieses Zwecks nicht erschweren werden. (S.354).

In Summa; es ist mir gewisser, als das gewisseste, daß wenn nicht die Franzosen die ungeheuerste Uebermacht erringen, und in Deutschland, wenigstens einem beträchtlichen Theile desselben, eine Revolution durchsetzen; in einigen Jahren in Deutschland kein Mensch mehr, der dafür bekannt ist in seinem Leben einen freien Gedanken gedacht zu haben, eine Ruhestätte finden wird.

Gesetzt, ich schweige ganz, schreibe nicht das geringste mehr; wird man mich unter dieser Bedingung ruhig lassen? Ich glaube das nicht; und gesetzt ich könnte es von den Höfen hoffen, wird nicht die Geistlichkeit, wohin ich mich auch wende, den Pöbel gegen mich aufhetzen, mich von ihm steinigen lassen, und nun - die Regierungen bitten, mich als einen Menschen der Unruhen erregt zu entfernen? Aber darf ich denn schweigen? Nein, das darf ich warlich nicht; denn ich habe Grund zu glauben, daß, wenn noch etwas gerettet werden kann des deutschen Geistes, es durch mein Reden gerettet werden kann, und durch mein Stillschweigen die Philosophie ganz, und zu früh, zu Grunde gehen würde. (S.355).

Vgl. „Reden an die deutsche Nation“(1807-1808): IV(3)4.

4) Engels „Der Status quo in Deutschland“(1847): Marx/Engels. Werke(IV(3)17). Bd.4. 1964. S.44.

England exportiert gar keine Ackerbauprodukte, sondern hat fortwährend auswärtige Zufuhren nötig; Frankreich importiert wenigstens ebensoviel davon, als es ausführt, und beide Länder stützen ihren Reichtum vor allem auf ihre Ausfuhr von Industrieerzeugnissen. Deutschland dagegen exportiert wenig Industrieprodukte, aber große Massen von Korn, Wolle, Vieh usw. ... Der politische Repräsentant des Ackerbaus ist in Deutschland wie in den meisten europäischen Ländern der Adel, die Klasse der großen Grundbesitzer. Die der ausschließlichen Herrschaft des Adels entsprechende politische Verfassung ist das Feudalsystem. Das Feudalsystem ist überall in demselben Maße zerfallen, in welchem der Ackerbau aufgehört hat, entscheidender Produktionszweig eines Landes zu sein, in welchem sich neben der ackerbauenden eine gewerbtreibende Klasse, neben den Dörfern Städte gebildet haben.

5) Engels: op.cit. S.44.

Deutschland dagegen exportiert wenig Industrieprodukte, aber große Massen von Korn, Wolle, Vieh usw. Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus war noch viel größer als jetzt zu der Zeit, als Deutschlands politische Verfassung festgesetzt wurde - im Jahre 1815, und wurde damals noch durch den Umstand vermehrt, daß gerade die fast ausschließlich ackerbaubetriebenden Teile Deutschlands sich am eifrigsten an dem Sturz des französischen Kaiserreichs beteiligt hatten.

6) Smith, Adam „An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations“(1776) 4.Buch: Of Systems of political OEconomy. 2.Kap.: The Wealth of Nations in 2 Bänden. Hrsg: Cannan, Edwin. London. Methuen. 1.Aufl. 1904. 3. Aufl. 1922. Bd.1. S.421.

he intends only his own gain, and he is in this, as in many other cases, led by an invisible hand to promote an end which was no part of his intention.

Vgl. Biblia germanica 1545. S.C: V.Buch Mose. V. 26.

die stimme des lebendigen Gottes ...

23)Nietzsche „Also sprach Zarathustra“(1891) I.Teil. 1883. Von den drei Verwandlungen: Werke. Kritische Gesamtausgabe. Berlin. Gruyter. 6.Abbteilung. Bd.1. 1968. S.26.

Welches ist der grosse Drache, den der Geist nicht mehr Herr und Gott heissen mag? „Du-sollst“ heisst der grosse Drache. Als sein Heiligstes liebte er einst das „Du-sollst“:

24)Hölderlin „Über Religion“(1799): StA 4. 281.

Gott der Mythe. So wäre alle Religion ihrem Wesen nach poetisch.

25)Hölderlin „Brod und Wein“ 4.Str.: StA 2. 92. Vgl. IV(2)17.

Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,

Wirde ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt

Vater! heiter! und hallt, so weit es gehet, das uralt

Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab. 70

Denn so kehren die Himmlischen ein, tiefschütternd gelangt so

Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag.

26)Hölderlin „Brod und Wein“ 6.Str.: StA 2. 93. V.105-V.108(IV(2)20).

27)Vgl. IV(2)17 und IV(3)25.

(4) GEMEINGEIST UND ALLEINHERRSCHAFT

1)Nietzsche „Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik“(1872): Gesamtausgabe(IV(3)23). 3.Abbteilung. Bd.1. S.123(9.Kapitel).

die deutsche Musik, wie wir sie vornehmlich in ihrem mächtigen Sonnenlaufe von Bach zu Beethoven, von Beethoven zu Wagner zu verstehen haben. Was vermag die erkenntnisslusterne Sokratik unserer Tage günstigsten Falls mit diesem aus unerschöpflichen Tiefen emporsteigenden Dämon zu beginnen?

Vgl. op.cit. 9.Kap. S.124.

denn gerade sie ist, inmitten aller unserer Cultur, der einzig reine, lautere und läuternde Feuergeist, von dem aus und zu dem hin, wie in der Lehre des grossen Heraklit von Ephesus, sich alle Dinge in doppelter Kreisbahn bewegen: alles, was wir jetzt Cultur, Bildung, Civilisation nennen, wird einmal vor dem untrüglichen Richter Dionysus erscheinen müssen.

Erinnern wir uns sodann, wie dem aus gleichen Quellen strömenden Geiste der deutschen Philosophie, durch Kant und Schopenhauer, es ermöglicht war, die zufriedne Daseinslust der wissenschaftlichen Sokratik, durch den Nachweis ihrer Grenzen, zu vernichten, wie durch diesen Nachweis eine unendlich tiefere und ernstere Betrachtung der ethischen Fragen und der Kunst eingeleitet wurde, wie wir geradezu als die in Begriffe gefasste dionysische Weisheit bezeichnen können: wohin weist uns das Mysterium dieser Einheit zwischen der deutschen Musik und der deutschen Philosophie,

2)Hölderlin „Deutscher Gesang“: StA 2. 202.

Wenn der Morgen trunken begeisternd heraufgeht

Und der Vogel sein Lied beginnt,

Und Stralen der Strom wirft, und rascher hinab

Die rauhe Bahn geht über den Fels,

Weil ihn die Sonne gewärmet. 5

.....

dann sitzt im tiefen Schatten, 15

Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,

Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter

Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers

Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,

Den Seelengesang. 20

Und noch, noch ist er des Geistes zu voll,

21) Biblia Hebraica Stuttgartensia. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967/77, 1984. S.89: Exodus. III. 14.

יְהוָה אֲשֶׁר יְהוָה: Ehyeh Asher Ehyeh.

Vgl. Septuaginta. Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes. Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt. 1935. 8.Aufl. 1965. Vol.I. S.90.

Ἐγώ εἰμι ὁ ὢν: Ego eimi ho oon: Ich bin der (wahrhaft) Seiende.

Vgl. Biblia iuxta Vulgatam Versionem(IV(2)21). Tomus I. S.79.

ego sum qui sum: Ich bin der ich bin. Hieronymos(340-419).

Vgl. Biblia germanica 1545(IV(2)22). II.Buch Mose. S.XXXIII.

Ich werde sein der ich sein werde. Luther(1483-1546).

Vgl. Platon „Phaidros“ 249C/247C: Werke(Griechisch/Deutsch: Schleiermacher) auf der Textgrundlage der „Oeuvres complètes(Collection des Universités de France)“(Paris. Les Belles Lettres. 1955-74). Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1971-81. Bd.5. S.84(S.85)/S.76(S.77).

τὸ ὄν ὄντως: to on ontoos (das wahrhaft Seiende). Phdr. 249C / 247C

ἡ οὐσία ὄντως οὐσα: hee uußiaa ontoos uußa (das wahrhaft seiende Wesen)

Vgl. Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin(IV(3)6). (II) Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. Anmerkung 68) und (III) „Gott der Mythe“. Anmerkung 34) und 93).

22) Biblia Hebraica Stuttgartensia(IV(3)21). S.119: Exodus. XX. 5.

אֵל קַנָּא: Eel qanna.

Vgl. Exodus XXXIV. 14: op.cit. S.144 und Deuteronomion IV. 24 / V. 9 / VI.

15: op.cit. S.292 / S.294 / S.297 und Gesenius, Wilhelm: Hebräisches und aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament. Bearbeitet von Frants Buhl. Unveränderter Neudruck der 1915 erschienenen 17. Auflage. Berlin/Göttingen/Heidelberg. Springer. 1962. S.717 über das Wort „qanna“.

eifersüchtig, v. Jahve

Vgl. Septuaginta(IV(3)21). Vol.I. S.120/S.146/S.293/S.295/S.298.

θεὸς ζηλωτῆς: theos zeelotees.

Vgl. Biblia iuxta Vulgatam Versionem. Tomus I. S.104/S.125/S.240/S.242/S.244.

ego sum Dominus Deus tuus fortis zelotes(Ex.XX.5)/ Dominus Zelotes nomen eius Deus est aemulator(Ex.XXXIV.14)/ Dominus Deus tuus ignis consumens est Deus aemulator(Dt.IV.24)/ ego enim sum Dominus Deus tuus Deus aemulator(Dt.V.9)/ Deus aemulator Dominus Deus tuus(Dt.VI.15). Aemulator(=Nach-eiferer).

Vgl. Biblia germanica 1545. S.XLIII/S.LII/S.XCIX/S.C/S.C.

Denn ich der HERR dein Gott / bin ein eueriger Gott / (II.Buch Mose.XX.5)

Denn der HERR heisst ein Euerer / darum das er ein eueriger Gott ist / (II.Buch Mose. XXXIV. 14)

Denn der HERR dein Gott ist ein verzehrend Fehr / vnd ein eueriger Gott. (V.Buch Mose. IV. 24)

Denn ich bin der HERR dein Gott / ein eueriger Gott / (V.Buch Mose. V. 9)

Denn der HERR dein Gott ist ein eueriger Gott vnter dir / (ibd. VI. 15)

Vgl. Die Bibel. Altes und Neues Testament. Einheitsübersetzung. Stuttgart.

Katholische Bibelanstalt. Freiburg i.Br./ Basel/Wien. Herder. 1980. S.72/S.86.

Denn ich, der Herr, dein Gott, bin ein eifersüchtiger Gott. (Ex. XX. 5)

Denn Jahve trägt den Namen »der Eifersüchtige«; ein eifersüchtiger Gott ist er. (Ex. XXXIV. 14)

Vgl. Nova Vulgata Bibliorum. Vaticana Libreria. 1979. S.107/S.127.

Deus zelotes(Ex. XX. 5) / Dominus Zelotes nomen eius, Deus est aemulator. (Ex. XXXIV. 14)

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia. S.296: Deuteronomion V. 26.

אֱלֹהִים חַיִּים: Elohyim Hayim.

/Bibelanstalt. 1930. S.76.

Vgl. Septuaginta. Vol.I. S.296: Dt. V. 26. /NT graece. Stuttgart. Württembergische

θεὸς ζῶν: theos zoon. Vgl. Novum Testamentum. Evangelium secundum Matthaeum. 26. 63:

Vgl. Biblia iuxta Vulgatam Versionem. Tomus I. S.243: Dt. V. 26.

Deus vivens. Vgl. Deus vivus(Ev.Matth.26.63: Tomus II. S.1570).

- 13) „Verzeichniß der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken und Manufakturen“ aus dem „Württembergischen Jahrbuch 1832“ herausgegeben vom 1820 eingerichteten „Statistisch-Topographischen Bureau“
 Fabrikat: Fußteppiche. Zahl der Arbeiter innerhalb der Fabrik: 0. Zahl der Arbeiter außerhalb der Fabrik: 8. ... Jahr der Entstehung: 1797.
- 14) „Stuttgarter Firmenbuch“ (1832)
 Landauersche Fußteppiche- und Wollwarenhandlung.
- 15) Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Bd. 24. 1979. S. 484.
 Verlagssystem ... als Stadium in der Entwicklung des Kapitalismus zwischen dem selbständigen Handwerk und der Manufaktur liegt.
- 16) Encyclopédie. Hrsg: Diderot, Denis. Bd. 10. Neuchâtel. Samuel Faulche. 1765. S. 60-62 über „MANUFACTURE“. „MANUFACTURE, RÉUNIE, DISPERSÉE.“ (S. 60).
 Par le mot manufacture, on entend communément un nombre considerable d'ouvriers, réunis dans le même lieu pour faire une sorte d'ouvrage sous les yeux d'un entrepreneur; De-là on peut distinguer deux sortes de manufactures, les unes réunies, & les autres dispersées. (S. 60).
- 17) Marx „Das Kapital“ Bd. 1. 1867. VII. Abschnitt. Der Akkumulationsprozeß des Kapitals. 24. Kapitel. Die sogenannte ursprüngliche Akkumulation. Marx zitiert aus „De la Monarchie Prussienne“ (London. 1788) von Honoré-Gabriel-Victor Mirabeau (1749-91): Marx/Engels. Werke. Berlin. Dietz. Bd. 23. 1962.
 Zur Zeit Mirabeaus, des Revolutionslöwen, hießen die großen Manufakturen noch manufactures réunies, zusammengeschlagne Werkstätten, wie wir von zusammengeschlagenen Äckern sprechen. „Man sieht nur“, sagt Mirabeau, „die großen Manufakturen, wo Hunderte von Menschen unter einem Direktor arbeiten, und die man gewöhnlich vereinigte Manu- (S. 774/S. 775) fakturen (manufactures réunies) nennt. Diejenigen dagegen, wo eine sehr große Anzahl Arbeiter zersplittert und jeder für seine eigne Rechnung arbeitet, werden kaum eines Blicks gewürdigt. Man stellt sie ganz in den Hintergrund. Dies ist ein sehr großer Irrtum, denn sie allein bilden einen wirklich wichtigen Bestandteil des Volksreichtums. ... Die vereinigte Fabrik (fabrique réunie) wird einen oder zwei Unternehmer wunderbar bereichern, aber die Arbeiter sind nur besser oder schlechter bezahlte Tagelöhner und nehmen in nichts am Wohlsein des Unternehmers teil. In der getrennten Fabrik (fabrique séparée) dagegen wird niemand reich, aber eine Menge Arbeiter befinden sich im Wohlstand. ...“ (S. 775)
- 18) Encyclopédie (IV(3)16). Bd. 10. Neuchâtel. Samuel Faulche. 1765. S. 61.
 A la grande manufacture tout se fait au coup de cloche, les ouvriers sont plus contraints & plus gourmandés. ... Chez le petit fabriquant, le compagnon est le camarade du maitre, vit avec lui, comme avec son égal; a place au feu & à la chandelle, a plus de liberté, & préfere enfin de travailler chez lui.
- 19) Diderot über „Encyclopédie“: Encyclopédie (IV(3)16). Bd. 5. Paris. Briasson/David/Le Breton/Durand. 1755. S. 636.
 C'est à l'exécution de ce projet étendu, non seulement aux différents objets de nos académies, mais à toutes les branches de la connoissance humaine, qu'une Encyclopédie doit suppléer; Ouvrage qui ne s'exécutera que par une société de gens de lettres & d'artistes, épars, occupés chacun de sa partie, & liés seulement par l'intérêt général du genre humain, & par un sentiment de bienveillance réciproque. Je dis une société de gens de lettres & d'artistes, afin de rassembler tous les talens. Je les veux épars, ... On s'applaudit intérieurement de ce que l'on fait; on s'échauffe;
- 20) Hölderlin „Brod und Wein“ 9. Str.: STA 2. 95.
 Keines wirkt, denn wir sind herzlos, Schatten, bis unser Vater Aether erkannt jeden und allen gehört. 153
 154

6)Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin - „Seeliges Griechenland“ [II] (6)-(7) und [III] (1)-(9). In: Forschungsberichte der Universität Kochi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. 1986. S.1-72. Vgl. vor allem [III] „Gott der Mythe“ (9) „Fest bleibt Eins“.

7)Hölderlin „Brod und Wein“ 5.Str.: StA 2. 92.

Möglichst dulden die Himmlischen diß; dann aber in Wahrheit
 Kommen sie selbst und gewohnt werden die Menschen des Glücks
 Und des Tags und zu schau'n die Offenbaren, das Antlitz
 Derer, welche, schon längst Eines und Alles genannt,
 Tief die verschwiegene Brust mit freier Genüge gefüllet, 85
 Und zuerst und allein alles Verlangen beglückt;

8)Hölderlin „Hyperion“ I.Band. 2.Buch. 30.Brief: StA 3. 81.

Das große Wort, das $\epsilon\nu\ \delta\upsilon\alpha\phi\epsilon\rho\nu\ \epsilon\alpha\upsilon\tau\psi$ (das Eine in sich selber unterschiedne) des Heraklit, das konnte nur ein Grieche finden, denn es ist das Wesen der Schönheit, und ehe das gefunden war, gabs keine Philosophie.

9)Hölderlin: Brief 183 an Neuffer. 3.Jul.1799: StA 6. 339.

Man will aber auch nur rührende erschütternde Stellen und Situationen, um die Bedeutung und den Eindruck des Ganzen bekümmern sich die Verfasser und das Publikum selten. Und so ist die strengste aller poetischen Formen, die ganz dahin eingerichtet ist, um, ohne irgend einen Schmuck fast in lauter großen Tönen, wo jeder ein eignes Ganze ist, harmonisch wechselnd fortzuschreiten, und in dieser stolzen Verläugnung alles Accidentellen das Ideal eines lebendigen Ganzen, so kurz und zugleich so vollständig und gehaltreich wie möglich, deswegen deutlicher aber auch ernster als alle andre bekannte poetische Formen darstellt - die ehrwürdige tragische Form ist zum Mittel herabgewürdigt worden, um gelegentlich etwas glänzendes oder zärtliches zu sagen.

10)Hölderlin: Brief 171 an Sinclair. 24.Dez.1798: StA 6. 301.

so ist auch daraus klar, wie innig jedes Einzelne mit dem Ganzen zusammenhängt und wie sie beide nur Ein lebendiges Ganze ausmachen, das zwar durch und durch individualisiert ist und aus lauter selbständigen, aber eben so innig und ewig verbundenen Theilen besteht.

11)Schiller „Die Räuber“ (1.Aufl. 1781. 2.Aufl. 1782) Titelblatt der 2.

Schauspielausgabe: Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlaus Nachfolger. Bd.3. 1953. Zwischen S.344 und S.345.

in Tirannos

Vgl. Aischylos „Perser“ V.241 über die Athener: Tragödien und Fragmente.

Tusculum(Griechisch/Deutsch)-Bücher. München. Heimeran. 1969(2.Aufl.). S.275.

Und wer führt, dem Volk ein Hirte, und gebeut, Zwingherr dem Heer?

Keines Menschen Sklaven sind sie, keinem Manne untertan.

Vgl. Euripides „Die bittflehenden Mütter (Hiketides)“ V.429 über den „Zwingherrn(Despotes: Tyrannos)“: Sämtliche Tragödien und Fragmente. Tusculum-Bücher. Griechisch/Deutsch. München. Heimeran. 1972(Bd.1-4)/1977(Bd.5)/1981(Bd.6). Bd.3. 1972. S.37.

Der Zwingherr ist der größte Feind des Staats!

Da gilt vor allem kein gemeines Recht, 430

Der eine hat die Macht, nimmt das Gesetz

In seine Hand und Gleichheit ist vorbei.

12)Schiller „Kallias / Brief an Körner vom 23.Feb.1793“: Sämtliche Werke in 5 Bänden. München. Hanser. 1965-76. Bd.5. S.422.

Eine Landschaft ist schön komponiert, wenn alle einzelne Partien, aus denen sie besteht, so ineinanderspielen, daß jene sich selbst ihre Grenze setzt und das Ganze also das Resultat von der Freiheit des Einzelnen ist. Alles in einer Landschaft soll auf das Ganze bezogen sein, und alles Einzelne soll doch nur unter seiner eigenen Regel zu stehen, seinem eigenen Willen zu folgen scheinen.

- 28) Goethe „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ (1796) I. Buch. 10. Kap.: HA 7. 37.
 Von der Handlung hattest du damals keinen Begriff; ich wüßte nicht, wessen Geist ausgebreiteter wäre, ausgebreiteter sein müßte als der Geist eines echten Handelsmannes. Welchen Überblick verschafft uns nicht die Ordnung, in der wir unsere Geschäfte führen! Sie läßt uns jederzeit das Ganze überschauen, ohne daß wir nötig hätten, uns durch das Einzelne verwirren zu lassen. Welche Vorteile gewährt die doppelte Buchhaltung dem Kaufmann! Es ist eine der schönsten Erfindung des menschlichen Geistes, und ein jeder gute Haushalter sollte sie in seiner Wirtschaft einführen.
- 29) Goethe „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ V. Buch. 2. Kap.: HA 7. 287.
 Das ist also mein lustiges Glaubensbekenntnis: seine Geschäfte verrichtet, Geld schafft, sich mit den Seinigen lustig gemacht und um die übrige Welt sich nicht mehr bekümmert, als insofern man sie nutzen kann. (Werner).

(3) „LANDAUERSCHE FUSSTEPPICHE- UND WOLLWARENHANDLUNG“

- 1) Hölderlin „Brod und Wein“ 3. Str.: StA 2. 91.
 Göttliches Feuer auch treibet, bei Tag und bei Nacht, 40
 Aufzubrechen. So komm! daß wir das Offene schauen,
 Daß ein Eigenes wir suchen, so weit es auch ist.
 Fest bleibt Eins; es sei um Mittag oder es gehe
 Bis in die Mitternacht, immer bestehet ein Maas,
 Allen gemein, doch jeglichem auch ist eignes beschieden, 45
 Dahin gehet und kommt jeder, wohin er es kann.
- 2) Rousseau, Jean-Jacques „Du Contrat Social“ (1762) Livre I. Chapitre 6.
 Enfin chacun se donnant à tous ne se donne à personne, Chacun
 de nous met en commun sa personne et toute sa puissance sous la suprême
 direction de la volonté générale; et nous recevons en corps chaque membre
 comme partie indivisible du tout.
 (Oeuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. Tome 3.
 1964. S. 361)
- 3) Kant „Die Metaphysik der Sitten“ (1797) ‚Rechtslehre‘ 46. Kap.: Werke. Akademie-Textausgabe (=AT). Unveränderter photomechanischer Abdruck des Textes der von der Preußischen Akademie der Wissenschaften 1902 begonnenen Ausgabe von Kants gesammelten Schriften. Berlin. Gruyter. 1968. Bd. 6. S. 313f.
 Also kann nur der übereinstimmende und vereinigte Wille Aller, so fern ein jeder über Alle und Alle über einen jeden ebendasselbe beschließen, mithin nur der allgemein vereinigte Volkswille gesetzgebend sein
- 4) Fichte „Reden an die deutsche Nation“ (1807-1808) 13. Rede: Werke. Fotomechanischer Nachdruck der „sämtlichen Werke“ (Hrsg: Fichte, Immanuel Hermann. Berlin. Veit & Comp. 1845/1846). Berlin. Gruyter. 1971. Bd. 7. S. 467.
 Die geistige Natur vermochte das Wesen der Menschheit nur in höchst mannigfaltigen Abstufungen an Einzelnen, und an der Einzelheit im Grossen und Ganzen, an Völkern, darzustellen. Nur wie jedes dieser letzten, sich selbst überlassen, seiner Eigenheit gemäss, und in jedem derselben jeder Einzelne jener gemeinsamen, so wie seiner besonderen Eigenheit gemäss, sich entwickelt und gestaltet, tritt die Erscheinung der Gottheit in ihrem eigentlichen Spiegel heraus, so wie sie soll; und nur der, der entweder ohne alle Ahnung für Gesetzmässigkeit und göttliche Ordnung, oder ein versteckter Feind derselben wäre, könnte einen Eingriff in jenes höchste Gesetz der Geisterwelt wagen wollen.
- 5) Hegel „Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems der Philosophie“ (1801) ‚Darstellung des Fichteschen Systems‘: Werke auf der Grundlage der „Werke“ (1832-45). Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1969-71. Bd. 2. S. 82.
 Die höchste Gemeinschaft ist die höchste Freiheit,

20) Hölderlin „Brod und Wein“ 6.Str.: StA 2. 93.

Warum zeichnet, wie sonst, die Stirne des Mannes ein Gott nicht, 105
 Drückt den Stempel, wie sonst, nicht dem Getröffenen auf?
 Oder er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an
 Und vollendet' und schloß tröstend das himmlische Fest.

21) Biblia. Evangelium secundum Mattheum. 26. 26ff: Biblia iuxta Vulgatam
 Versionem. Deutsche Bibelgesellschaft. 1.Aufl. 1969. 3. verbesserte Aufl.
 Stuttgart. 1983. Tomus II. S.1568.

Cenantibus autem eis accepit Iesus panem et benedixit ac fregit
 deditque discipulis suis et ait
 accipite et comedite hoc est corpus meum
 Et accipiens calicem gratias egit et dedit illis dicens
 bibite ex hoc omnes
 hic est enim sanguis meus novi testamenti

22) Hölderlin „Emilie vor ihrem Brauttag“: StA 1. 278.

Der, wie ein stiller Gott auf dunkler Wolke,
 Verborgenkundig über seiner Welt 30
 Mit freiem Auge ruht,

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia(IV(3)21). Jesaia. 45. 15. S.746.

אל קספיה : Eel Mißstateer (Deus absconditus).

Vgl. Biblia iuxta Vulgatam Versionem(IV(2)21). Tomus II. S.1144.

vere tu es Deus absconditus Deus Israhel salvator

Vgl. Biblia germanica 1545. Deutsch: Luther. Faksimilierte Ausgabe. Stutt-
 gart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967, 1983. Jesaia. 45. 15. S.XXV.

FVRwar du bist ein verborgen Gott / du Gott Israel der Heiland.

23) Hölderlin: Brief an den Bruder. 1.Jan.1799: StA 6. 307.

Vor allen Dingen wollen wir das große Wort, das homo sum, nihil humani a
 me alienum puto, mit aller Liebe und allem Ernste aufnehmen;

24) Hölderlin: Brief an Neuffer. 12.Nov.1798: StA 6. 289.

Es fehlt mir weniger an Kraft, als an Leichtigkeit, weniger an Ideen, als
 an Nüancen, weniger an einem Hauptton, als an mannigfaltig geordneten Tö-
 nen, weniger an Licht, wie an Schatten, und das alles aus Einem Grunde;
 ich scheue das Gemeine und Gewöhnliche im wirklichen Leben zu sehr.

Vgl. Horatius „Carmina“ Liber III. 1: Opera. Bibliotheca Teubneriana. Leip-
 zig. Teubner. 1970. S.65.

Odi profanum volgus et arceo.

Das Volk der Spötter hass' ich, hinweg mit ihm!

(Carmina/Gedichte. Mit Übersetzung deutscher Dichter. dtv-zweisprachig.
 München. Deutscher Taschenbuch Verlag. 1977. S.125. Deutsch: Geibel,
 Emanuel)

25) Landauers Brief an Hölderlin. 22.Aug.1801: StA Bd.7. 1.Teil. S.169.

Dein Schirm ist durchaus nirgends zu finden. Dich erwarttet mit offenen
 Armen Dein C. Landauer

26) Hölderlin: Eine Chronik in Text und Bild. Hrsg: Beck, Adolf / Raabe,
 Paul. Schriften der Hölderlin-Gesellschaft. Bd.6/7. Frankfurt am Main. In-
 sel. 1970. Bild-Erläuterungen von Beck. S.371f. über Jakob Friedrich Gontard.

Der Überlieferung nach war er reiner Geschäftsmann mit dem Wahlspruch:

«Les affaires avant tout», dabei von »nervöser Erregbarkeit«.

Für seine erste Frau und den Dichter hatte er gewiß nicht eben viel Ver-
 ständnis;

27) Heuschele, Otto: Hölderlins Freundeskreis. Stuttgart. Theiss. 1975. S.86.

Es waren kaum größere Gegensätze denkbar als der Bankier Gontard und der
 Kaufmann Landauer. Während jener ein kühler Weltmann gewesen sein muß,
 verstand es dieser, die praktischen Lebensaufgaben mit einem hohen Sinn
 für das Schöne zu verbilden.

8)Hölderlin: Brief 208 an die Mutter. Ende Juni oder Anfang Juli 1800: StA 6. 395.

Ich halte es für ein Glück, daß mir schon das anständige und erwünschte Anerbieten von einem jungen Manne, der in der Canzlei arbeitet, gemacht worden ist, daß ich ihm Stunden in der Philosophie geben möchte, wofür mir monatlich ein Karolin bezahlt wird.

9)Hölderlin: Brief 209 an die Mutter. Um 20.Juli.1800: StA 6. 397.

Ich habe auch wieder einen neuen Antrag zu Lectionen von HE. Registrator Gutscher, den ich noch von Rastadt aus kannte, bekommen. Wahrscheinlich will mich HE. Registrator Frisch vierteljährlich bezahlen, denn ich habe noch nichts von ihm eingenommen, kann aber, wie ich weiß, in jedem Falle auf seine Generosität rechnen.

10)Vgl. IV(2)3.

11)Hölderlin: Brief 215 an die Schwester. Anfang Okt. 1800: StA 6. 401.

Landauer scheint sehr zu wünschen daß ich bleibe, und hat Anstalten gemacht, daß ich vielleicht einige Informationen mehr, also ungefähr 3 Luidor des Monaths erhalte.

12)Goethe: Werke. Hamburger Ausgabe (=HA). München. Beck/dtv. 1982. Bd.3. „Faust“. S.364.

Alles Vergängliche	
Ist nur ein Gleichnis;	12105
Das Unzulängliche,	
Hier wird's Ereignis;	
Das Unbeschreibliche,	
Hier ist's getan;	
Das Ewig-Weibliche	12110
Zieht uns hinan.	

13)Hölderlin: Brief 118 an Neuffer. März 1796: StA 6. 205.

Mir geht es so gut, wie möglich. Ich lebe sorgenlos, und so leben ja die seeligen Götter.

Vgl. Hölderlins Brief an den Bruder(11.2.1796):StA 6. 201.

Deus nobis haec otia fecit.

14)Hölderlin „Brod und Wein“ 7.Str.: StA 2. 94.

.....	Indessen dünket mir öfters	
Besser zu schlafen,	wie so ohne Genossen zu seyn,			120
So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,				
Wei ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?				

15)Hölderlin „Brod und Wein“ 3.Teil: Hesperische Nacht.

16)Hölderlin „Der Mutter Erde“: StA 2. 123.

17)Hölderlin „Brod und Wein“ 4.Str.: StA 2. 92.

Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?	
Delphi schlummert und wo tnet das groe Geschik?	
Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwrtigen Glcks voll	
Donnernd aus heiterer Luft ber die Augen herein?	
Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge	65
Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;	

18)Nietzsche „Die Geburt der Tragdie“: „Aus dem Geiste der Musik“(1872). „Oder: Griechentum und Pessimismus“(1886).

19)Hölderlin „Brod und Wein“ 8.Str.: StA 2. 94.

Nemlich, als vor einiger Zeit, uns dnket sie lange,	125
Aufwrts stiegen sie all, welche das Leben beglckt,	
Als der Vater gewandt sein Angesicht von den Menschen,	
Und das Trauern mit Recht ber der Erde begann,	
Als erschienen zu lezt ein stiller Genius, himmlisch	
Trstend, welcher des Tags Ende verkndet' und schwand,	130

- 11)Hölderlin: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe (=StA). Stuttgart. Kohlhammer. 1946-77. Bd.2. „Brod und Wein“ 1.Str. V.1-6. S.90.
 Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
 Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
 Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
 Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
 Wohlzufrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen, 5
 Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.
- 12)Das deutsche Gedicht(IV(1)7). S.129.

(2) CHRISTIAN LANDAUER

- 0)Hölderlin „Brod und Wein“ 1.Str. V.7-13: StA 2. 90.
 Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß
 Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann
 Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen
 Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10
 Still in dämmriger Luft ertönen geläutete Glocken,
 Und der Stunden gedenk rufet ein Wächter die Zahl.
 Jezt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
- 1)Hölderlin „Über die Verfahrungsweise des poetischen Geistes“: StA 4. 260.
 das Harmoniscentgegengesetzte in der lebendigen Einheit
- 2)Hölderlin: Brief 243 an Friedrich Wilmans. Dez. 1803: StA 6. 436
 Übrigens sind Liebeslieder immer müder Flug, denn so weit sind wir noch
 immer, trotz der Verschiedenheit der Stoffe; ein anders ist das hohe und
 reine Frohloken vaterländischer Gesänge.
- 3)Hölderlin: Brief 210 an die Mutter. Juli 1800: StA 6. 398.
 Wenn ich denke, wie viel stärker und gesünder ich mich seit der Verände-
 rung meins Aufenthalts fühle, und wie sich meine jezige Lage täglich an-
 gemessener für meine Bestimmung und sicherer zu meinem Auskommen bildet,
 so fühle ich eine Zufriedenheit und Ruhe, die ich lang entbehrte, und ich
 hoffe, es soll so bleiben, und dieser Zustand werde einen vesten und fro-
 hen Dank gegen die theuern Meinigen und gegen meine Freunde in mir erhal-
 ten. Ich habe jezt drei Anerbieten zu Lectionen, die mir alle angenehm
 sind.
- 4)Hölderlin „An Landauer“(1800): StA 2. 114. 5
 Und seelig, wer im eignen Hauße Frieden,
 Wie du, und Lieb' und Fülle sieht und Ruh;
 Manch Leben ist, wie Licht und Nacht, verschieden,
 In goldner Mitte wihnest du.
 Dir glänzt die Sonn' in wohlgebauter Halle,
 Am Berge reift die Sonne dir den Wein, 10
 Und immer glücklich führt die Güter alle
 Der kluge Gott dir aus und ein.
- 5)Vgl. IV(2)7.
- 6)Das Testament der Mutter Hölderlins: StA Bd.7. 1.Teil. S.391.
 der thätige geist meines l. S Mans
- 7)Hölderlin: Brief 126 an den Bruder. 13.10.1796: StA 6. 217.
 Philosophie mußst Du studiren, und wenn Du nicht mehr Geld hättest, als nö-
 thig ist, um eine Lampe und Öl zu kaufen, und nicht mehr Zeit, als von
 Mitternacht bis zum Hahnenschrei. Das istes, was ich in jedem Falle wie-
 derhohle, und das ist auch Deine Meinung. Professoren und Universitäten
 kannst Du freilich im Nothfall entbehren, aber ich möchte Dir denn doch
 gönnen, lieber Junge! daß Du Dich weniger leiden müßtest, um Dein edelstes
 Bedürfniß zu befriedigen. Es sollte mich so herzlich freuen, einmal in Dir
 den Denker und Geschäftsmann, wie es sich gehört, vereint zu sehen.

QUELLENNACHWEIS

(IV) „EIN SINNIGES HAUPT“

(1) VORWORT

1) Homburg vor der Höhe in der deutschen Geistesgeschichte. Studien zum Freundeskreis um Hegel und Hölderlin. Hrsg: Jamme, Christoph / Pöggeler. Stuttgart. Klett-Cotta. 1981. Einleitung von Otto Pöggeler. S.17.

was im Frankfurt-Homburger Raum für die deutsche Geistesgeschichte getan wurde, darf nicht vorschnell im Licht von Weimar und Jena gesehen werden, denn es ist unvergleichbar. Hier im deutschen Westen war der politische Umsturz, den die Französische Revolution einleitete, ganz nahe; das Leben in der freien Reichsstadt und die ständischen Aktivität in Württemberg oder überhaupt im Südwesten hatten eine bürgerliche Tradition ausgebildet. Wenn die Forderung einer „neuen Mythologie“ weiterentfaltet wurde, dann nicht primär vom Literarisch-Ästhetischen her; vielmehr sah man die politische Dimension, die auch zur Mythologie gehört, und für einstige Theologen wie Hölderlin und Hegel hatte die „neue Mythologie“ oder „schöne Religion“ einen letzten existenziellen Ernst.

2) Japanische Hölderlin-Ausgabe. 1966-69. Bd.2. S.109.

3) Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (Forschungsberichte der Universität Kochi. Vol.32. Geisteswissenschaften. 1984. S.21-70). [III] Bürger. (1) Bürgerleben. S.38-39.

4) Hölderlin: OEuvres. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. 1967. „Le Pain et le vin“ (Französisch: Roud, Gustave). S.808.

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,

Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et meurt.

Rassasiés des plaisirs du jour, vers le repos s'en vont les hommes,

Et satisfait, songeur, un front penché soupèse

Pertes et gains. Dépouillé de ses fleurs, dépouillé de ses grappes, 5

Las du labeur de mille mains, désert, le marché dort.

5) Hölderlin: Poesie. Nuova Universale Einaudi. Bd.33. Torino. Einaudi. 1963. Italienisch: Vigolo, Giorgio. „Pane e vino“. S.101.

Riposa intorno la città: si tace la via illuminata

E ornati di fiaccole, lontano trabalzano i cocchi.

Sazi delle gioie del giorno al riposo rientrano gli uomini

E perdita e profitto, giudizioso capo soppesa

Nella sua casa contento; vuoto sta d'uve e di fiori 5

E da mestieri e lavori il mercato riposa.

6) Hölderlin (Deutsch/Englisch): Poems & Fragments. Englisch: Hamburger, Michael. Cambridge Universitätsverlag. 1980. „Bread and Wine“. S.243.

Round us the town is at rest; the street, in pale lamplight, grows quiet

And, their torches ablaze, coaches rush through and away.

People go home to rest, replete with the day and its pleasures,

There to weigh up in their heads, pensive, the gain and the loss,

Finding the balance good; stripped bare now of grapes and of flowers, 5

As of their hand-made goods, quiet the market stalls lie.

7) Das deutsche Gedicht. Hrsg: Schinzinger, Robert. Japanische Anmerkungen von Minoru Nambara. Daisan-Shobo. 1969. Anmerkungen. S.129.

8) Vgl. IV(1)11.

9) Wackwitz, Stephan: Trauer und Utopie um 1800 — Studien zu Hölderlins Elegienwerk. Stuttgart. Hans-Dieter Heinz. 1982. S.30.

Im Gegensatz zur menschlichen Erinnerung, die allein Verluste — die vergangene Jugend und die fernen Freunde — bilanzieren kann, ist die ökonomische Reflexion — die Überlegungen des „sinnigen Haupt“, des bourgeois — affirmativ. „Gewinn und Verlust“ werden „wohlzufrieden“ bedacht, denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt.

10) Vgl. IV(1)11.

Diese Rückständigkeit war sowohl wirtschaftlich als auch politisch in der damaligen Übergangszeit vom monarchischen Feudalismus zum republikanischen Bürgertum. Denn „das Feudalsystem ist überall in demselben Maße zerfallen, in welchem der Ackerbau aufgehört hat, entscheidender Produktionszweig eines Landes zu sein, in welchem sich neben der ackerbauenden eine gewerbtreibende Klasse, neben den Dörfern Städte gebildet haben“ (IV(4)4), wie Engels im Aufsatz „Der Status quo in Deutschland“ (1847) behauptete. In der geschichtlich notwendigen Entwicklung der industriellen Revolution mußte schließlich, wie in Manns „Buddenbrooks. Verfall einer Familie“ (1801), jene wirtschaftlich „väterliche Regierung“ der hanseatischen Patrizier sich in ihren Untergang fügen, weil der Zollverein die bisherigen partikularischen Zollgrenzen der Kleinstaaterei auflösen und Deutschland im wirtschaftlichen Sinne vereinigen wollte. Daraus folgte, daß „die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus“ (IV(4)5) als „Status quo in Deutschland“ sich abschwächte und in der aufgehenden Gewerbereform „vaterländische“ Firmen wie die „Landauersche Handlung“ sich entwickelten, sodaß Deutschland nicht nur auf kulturellem Gebiet wie in der Musik und Philosophie, sondern auch auf dem wirtschaftlichen Feld aufstieg, um im „harmoniscentgegengesetzten“ Kontrapunkt mit anderen fortgeschrittenen Mächten wie Frankreich zu stehen.

In der Tat hat die „Landauersche Handlung“ einen großen Aufschwung erlebt; Die im Jahr 1897 gegründete „Gebrüder Landauer-AG“ findet sich als „Manufakturwaren- Herren und Damen-Konfektion“ im „Verzeichnis der Firmenjubiläen“ (1931). Aber diese Aktiengesellschaft verschwand in der Zeit der Nationalsozialisten. Davon zeugt die „Chronik der Stadt Stuttgart 1933-45“: „12. III. 1942. Die geheime Staatspolizei Stuttgart gibt bekannt, daß das Vermögen des Louis Israel Landauer (1858 - 1940), letzter Wohnsitz in Stuttgart, zur Förderung volks- und staatsfeindlicher Bestrebungen gebraucht und bestimmt war. Daher werden die inländischen Vermögenswerte des Louis Israel Landauer zu Gunsten des D. Reiches eingezogen.“ (IV(4)13).

Über Christian Landauer lautet es in „Hölderlin. Eine Chronik in Text und Bild“: „Politisch war auch er Republikaner, Demokrat“ (IV(4)16). Dieser jüdische Deutsche republikanischer und demokratischer Gesinnung war natürlich kein schwäbischer Hofjude, wie Joseph Süß Oppenheimer (1692-1738), der wohl einmal als Geheimer Finanzienrat am Württembergischen Hof bevorzugt, aber später wegen der Regierungsumbildung am 4. Februar 1738 vor der Öffentlichkeit durch den Strang hingerichtet wurde. Um sich auf wirtschaftlichem Gebiet zu verwirklichen, vermochte sich der reiche Jude vor der Französischen Revolution (1789ff) und der industriellen Revolution Deutschlands höchstens mit dem Hofe zu liieren. Dagegen fand es das „sinnige Haupt“ um 1800 gar nicht mehr nötig, durch solche Politik Macht über das wirtschaftliche Feld zu ergreifen, sondern er stand im neuen Bund mit dem heranwachsenden Bürgertum zur Bekämpfung des Feudalsystems und konnte auch den weltfremden „Dichter in dürftiger Zeit“ (V.122) fest auf dem Schoß halten.

Dieses seltene „Harmoniscentgegengesetzte“ (IV(2)1) zwischen den beiden fremden Seelen führt zum antiautokratischen Kerngedanken der Gedankenlyrik:

Allen gemein, doch jeglichem auch ist eignes beschieden,
(„Brod und Wein“ 3. Str. V.45: IV(3)1)

Dieses republikanische Moment, das man damals als Grundprinzip zur Gestaltung der bürgerlichen Gesellschaft der europäischen Moderne ansah, wie z.B. Rousseau in „Du Contrat Social“ (1762): „chaque membre comme partie indivisible du tout“ (IV(3)2), möchte ich hier auf die Betriebsverhältnisse der „Landauerschen Fußteppiche- und Wollwarenhandlung“ (1797ff.) beziehen, um den antiautokratischen Gemeingeist des betreffenden „sinnigen Hauptes“ auch auf dem wirtschaftlichen Gebiet zu bestätigen.

Nach der Lektüre des vom 1820 eingerichteten „Statistisch-Topographischen Bureau“ herausgegebenen „Verzeichnisses der im Königreich Württemberg befindlichen Fabriken und Manufakturen“ (1832) wird folgendes klar, daß die „Landauersche Handlung“ eine „getrennte Fabrik (fabrique séparée)“ (IV(3)17) auf der Grundlage des herkömmlichen „Verlagsystems“ sei, das „als Stadium in der Entwicklung des Kapitalismus zwischen dem selbständigen Handwerk und der Manufaktur liegt“ (IV(3)15). Im zehnten Band der von Diderot herausgegebenen „Encyclopédie“ (1765) steht diese „getrennte Manufaktur (manufacture dispersée)“ im scharfen Gegensatz zur „vereinigten Manufaktur (manufacture réunie)“ (IV(3)16), die fast nur „einen oder zwei Unternehmer wunderbar bereichern“ (IV(3)17) kann, wo „tout se fait au coup de cloche, les ouvriers sont plus contraints & plus gourmandés“ (IV(3)18), während „in der getrennten Fabrik dagegen niemand reich wird, aber eine Menge Arbeiter sich im Wohlstand befinden“ (IV(3)17), wie Marx später im ersten Band von „Das Kapital“ (1867) analysierte. Daraus ergibt sich, daß das „sinnige Haupt“ nicht nur im freundlichen Umgang mit dem Dichter, sondern auch auf dem wirtschaftlichen Gebiet jenes antiautokratische Element der republikanischen Gesinnung verkörperte, das auch der „Vater Aether“ (V.65) inmitten des „himmlischen Festes“ (V.102) des „seeligen Griechenlandes“ (V.55) von „Brod und Wein“ verbildlicht: „Vater Aether erkennt jeden und allen gehört.“ (V.154)

Ferner behandelt diese Arbeit die „Landauersche Handlung“ unter Berücksichtigung des „hohen und reinen Frohlokens vaterländischer Gesänge“ (IV(2)2) in Hinsicht auf den „Deutschen Zollverein“ (1834–67), der wohl für „nicht eine väterliche, sondern eine vaterländische Regierung (imperium non paternale, sed patrioticum)“ (IV(5)5) auf dem wirtschaftlichen Gebiet galt. Hier geht es um die gegensätzlichen Handelsinteressen zwischen den neu heranwachsenden Unternehmern im „vaterländischen“ Inland, wie Landauer im Südwesten, und den bestehenden Handelsherren der Hansestädte im 19. Jahrhundert. Denn der ausschließliche Überseehandel der „väterlichen“ Hansestädte, wie z.B. ihre Einfuhr der Textilwaren aus dem technisch fortgeschrittenen Britannien, widersprach dem selbständigen Gewerbefleiß der heranwachsenden Webwarenfabriken im Inland. Dabei führten die Hansestädte Getreide, Schafwolle, Vieh usw. nach Britannien aus. Solange also das deutsche Gewerbe von diesem einseitigen Überseehandel abhing, mußte es sich leider in seine Rückständigkeit fügen.

ÜBER DIE ERSTE STROPHE VON HÖLDERLINS

„BROD UND WEIN“ : „HEILIGE NACHT“.

ZWEITER TEIL : [IV] „EIN SINNIGES HAUPT“

TAKAHASHI, Katsumi

(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)

INHALT

[I]	EINLEITUNG	S. 2-S. 5 (Vol. 34. S.156-S.159)	
[II]	„RINGS UM RUHET DIE STADT“		
(1)	Stabreim und Versfuß	S. 6-S. 7	S.160-S.161)
(2)	Verinnerlichung	S. 8-S.11	S.162-S.165)
(3)	„Die lebendige Ruhe“	S.11-S.15	S.165-S.169)
[III]	ERLEUCHTUNG UND BELEUCHTUNG		
(1)	„Das Werden im Vergehen“	S.16-S.17	S.170-S.171)
(2)	Lampenlicht und Mondschein	S.17-S.22	S.171-S.176)
(3)	„Gährung und Auflösung“	S.22-S.28	S.176-S.182)
[IV]	„EIN SINNIGES HAUPT“		
(1)	Vorwort	S.29-S.30 (Vol. 35. S. 68-S. 69)	
(2)	Christian Landauer	S.30-S.35	S. 69-S. 74)
(3)	„Landauersche Fußteppiche- und Wollwarenhandlung“	S.35-S.38	S. 74-S. 77)
(4)	Gemeingeist und Alleinherrschaft	S.38-S.42	S. 77-S. 81)
(5)	Schlußwort	S.42-S.44	S. 81-S. 83)

QUELENNACHWEIS

Zum Verständnis dieser Arbeit

ZUM VERSTÄNDNIS DIESER ARBEIT

Mit der Betrachtung über „ein sinniges Haupt“ (V.4) fängt meine Untersuchung an. Hinter diesem „sinnigen Haupt“ tritt Hölderlins Freund Christian Landauer (1769-1845) als wohlhabender Tuchhändler in Stuttgart auf die Schwäbische Geschichtsbühne hervor. In der „harmoniscentgegengesetzten“ Freundschaft des Dichters mit diesem Kaufmann können wir „den Denker und Geschäftsmann, wie es sich gehört, vereint sehen“ (IV(2)7), obwohl die sich widersprechenden Möglichkeiten des menschlichen Daseins, wie etwa „Künstler und Bürger“, in der alltäglichen Wirklichkeit oft schwer zu versöhnen sind, wie man es gerade im Zwiespalt zwischen Hölderlin und dem Bankier Jakob Gontard (1764-1843) bestätigt.